

輪廻を引き起こす力

— 特に Prajñākaragupta による解釈 —

林 慶仁

はじめに

輪廻というテーマは、インド思想一般の根底にある概念 — あるいは怯え — であるだけでなく、仏教においてもそのテーマを越えてその教義は成立を見ない。仏教が仏教学へ変容する過程において、あるいはした後でもこの語は最も重要な言葉の一つとして残され、解釈が施される。それは所謂仏教論理学派と呼ばれる人達についても例外ではない。本稿で扱うのはその中の一人 Prajñākaragupta と呼ばれる人の解釈についてである。最初に彼に辿り着くまでの輪廻の扱いの過程を簡単に見て、その次に彼の輪廻観の断面を覗いていきたい。

仏教の教祖、仏陀の悟った内容の一つに縁起観がある。特に十二支縁起は、一切法のあり方を問題にしているのと同時に有情の生存のあり方 — 則ち輪廻の様態 — をも問題としている（『仏教学序説』p.83）。多くの場合最初の無明と行を除いた十支の形を有していたが、残りの二支も加えられて十二支が完成したとされる（ibid. p.87）。特にここでは第一支の無明が重要なポイントとなる。十二支が輪廻の様態を示すものであれば、その最も重要な原因となるからである。無明は渴愛と並列的に並べられ、不離の関係として説かれていた。（しかし第八支に愛（渴愛）が取り入れられている。）ここで説かれる無明と渴愛が後の Dharmakīrti の輪廻思想にも影響を及ぼしていくのだが、そのことについては後に見ていこう。また無明によって、凡夫の生活（行）が生じ、その行は凡夫の識自体に影響していく（ibid. p.94）。因に仏陀は識が輪廻の主体とすることを否定していたとされている（『葉』p.180）。

中観派における輪廻の扱いは梶山博士の論文（〔梶山〕）にまとめられている。特

に龍樹の解釈についてのみ見よう。龍樹の作とされる『因縁心論』は十二支を惑業苦の三種より分類し、無明・愛・取が惑、行と有が業、その他を苦としている。そしてこれは『大毘婆沙論』『十地經』と立場を同じくしている (ibid. p.113)。その根本原因たる無明は本来その原因のないものではあるが、顛倒を原因とすると言い換えることもできる、とされる (ibid. p.139)。また他の註釈者達によるとその原因を不如理作意とする場合もある (ibid. p.141)。その無明よって行 (行為) が生じ、それによって識が生じる。梶山博士は「ナーガールジュナが識の転生を信じていたことは疑いを容れない。」 (ibid. p.143,11-12) と結論している。

唯識派における十二支の解釈をしたのは『中辺分別論』『摂大乘論』『瑜伽師地論』『成唯識論』である (『葉』 p,167)。『十地經』によると無明を原因とした行の働きが心に種子 (bija) を植える。それによって有情は輪廻する (ibid. p.172-3)。そしてその説を例えば『中辺分別論』でも是認する (ibid. p.175-78)。その無明を輪廻の原因と捉えている。詳しくは『葉』を参照されたい。

経量部的な立場を仮に取りながらも、最終的には唯識説にその立場を取る、と現在は解釈されている Dharmakīrti (ダルマキールティ 600-660) は (『戸崎 上』 pp.37-54)、人の輪廻を扱う上で、二種類の説を出していることは既に知られている。一つは既に解脱を得たブツダの輪廻であり、もう一つは凡夫の輪廻である。解脱を得たブツダの輪廻とは如何にも不自然であるが、それは大乘仏教で言う所謂無余依涅槃の考えに基づいている。解脱を既に得た如来が、自らの意志で、衆生済度のために輪廻に留まるという考えである。この二つの説については研究が進んでおり、我々は容易にダルマキールティ自身の輪廻観を知ることができる。そこで最初にこの二つの説がどのようなものか、先行研究に基づきながら簡単に纏めておきたい。

最初に如来の輪廻である。前世を認めない他の学派より、一生を越えて慈悲を集積することが不可能である、という批判に対して答える形で表現される ([稲見 (上)] p.2 [Namai] p.231)。

sādhanam karuṇābhyāsāt sā ; (PV II 34a)

「[世尊が量であることを] 証明するのは慈悲である。それ (慈悲) は修習よりある。」

という最初の議論に対して、心は身体に依存するのだから何世にも亘る慈悲の修

習は不可能であると敵者は言う。それに対して、ダルマキールティは知は身体に依存しないという観点から反論を行う (PV II 34bcd)。そしてこの後に知は身体に依存しないことに関する説明が続けられる。しかしながら過去の行 (saṃskāra) が滅した場合、その人は他の生に結生しないから解脱することになる (nāmukṭiḥ pūrvasaṃskāraḥsaye 'nyāpratisandhiḥ PV II197cd)。にも拘わらず大きな慈悲を有する者達は、他者 [の救済] に従事しつつ [輪廻の世界に] 留まるのである (tiṣṭhanty eva parādhiṇāḥ yeṣāṃ tu mahatī kṛpā / PV II 199ab) ([稲見 (下)] p.43)。この考えこそが無住処涅槃の考えに基づき、ダルマキールティの理想として掲げられる。しかしこの考えも凡夫の輪廻・生死を前提としているものであり、次の凡夫の輪廻が — ダルマキールティの記述の順序同様 — 考察されるべきである。

ダルマキールティは、前世、今世、来世を貫く心の相続というものを認め、それを持って凡夫の輪廻の論証の前提とする。それは ([稲見 (下)] p.33 [Namai]) チャールヴァーカ派との対論を通じて行われている。結局まさに死を向かえようとしている人間にとって、次の生に結生しない原因というものは認められないのである ([稲見 (下)] p.34 [Namai])。

以上の Dharmakīrti 説の俯瞰を通じて、次のような疑問が浮かぶ。第一の如來の輪廻について、修習によって、どうして現世より来世に亘って輪廻することが可能なのか。また凡夫が心相続によって、どうして輪廻を起こすのか、である。これに関しても、既に先行研究がある。

仏陀が解脱を得た後でも、輪廻の世界に留まることがどうして可能なのか。何世にも亘って可能な慈悲の修習の根拠は、ダルマキールティ自身によって示されている。仏陀の慈悲は再度の努力 (punar yatna) が必要であったり、非堅固な所依 (asthirāśraya) (PV II 121ab [稲見慈悲] p.364) を持っているのではない。慈悲等は自然に (svarasena) 働く (PV II 124cd [稲見慈悲] p.364) のである。では何によって慈悲が自然に働くようになるのか。慈悲は修習を原因としており、修習によって慈悲がその人の本性となる (kṛpātmakatvam abhyāsād PV II 131a [稲見慈悲] p.362)。そしてそこには種子が介在する。則ち慈悲等の諸知は、同種類の先行する種子が増大するものであるから、修習が行われる場合、留まることなく、増大する (yasmāc ca tulyajātyapūrvabījappravṛddhayaḥ / kṛpādibuddhayaḥ tāsāṃ saty abhyāse kutaḥ sthitiḥ // PV II 126 [稲見慈悲] p.363)。この場合には種子が悪い意味として使用されていない。仏陀は慈悲の修習を行い、それに

よって種子が増大し、慈悲がその人の本性となり、自然に発動される、と図式することが可能である。

凡夫の輪廻の原因は、PV II 82 に示される如く、顛倒した心 (viparyāsamati) と渴愛 (trṣṇā) である。これは原始仏教における十二支の解釈を引き継ぐものであり、伝統的な中観系統以来の伝統を引いている解釈である。

この Dharmakīrti の説に対して様々な註釈が施されるのだが、Prajñākaragupta (8-9c) もその註釈者の一人である。彼の他に註釈者は多いが、他の註釈者の研究が比較的進んできてくるのに対して、まだ彼の研究は遅れていることは否定できない。その原因としていくつかを挙げることができようが、その註釈が長文に過ぎ、それに伴い独自の思想を形成しており、研究には細心の注意が必要とされる点が挙げられよう。よってここでは Prajñākaragupta のテキストのうち、特にこの輪廻の原因について言及した箇所を和訳研究していきたい。

またここで特に明示しておかなければいけない情報がある。この輪廻の解釈に関して、最近 Franco 博士の研究が出された ([Franco])。この研究には Prajñākaragupta の英訳を含むが、これは拙訳に出した箇所をすべてカバーしている研究であった (op.cit. p.242,28-p.258,2)。よって本稿は結果的に Franco 博士の訳の後を追う形となり、更に日本語訳を出すことは必要ない作業となってしまったように思われる。しかし博士が二つの註釈 (Jayanta, Yamāri のもの) を全く参照していないこと、それに伴って PVBh の訳そのものを再考する必要が生じる箇所のあること、また本稿で扱われているのは Prajñākaragupta の思想を支える重要な三つの柱の一つである Svapnāntikaśarīravāda (これについては別稿を準備している) に相当する部分を含んでいること等、によって敢えて拙訳を提出することにした。拙訳を作成する段階で当然博士の業績を目にすることはなかったが、最終的に見比べてみると、ほぼ同じような読解、翻訳になっていたと言ってよからう。博士が Yamāri 等の註を参照せずに、読解を行っておられるという点は特筆あるいは驚嘆に値する。また若干の点で博士との読解の相違をも有しているが、あるいはその他裨益した箇所等を含め、すべて註の中でその箇所を示した。

また今回写本を参照したいと思いつつ様々な条件よりできなかった。ただ PVBh の写本が、近い将来日本の某所で刊行されるということを漏れ聞いている。その公表によって更にこのテキストの研究が進むことであろうと思われる。

最後に早稲田大学の岩田孝教授に読解のアシストを頂きましたことを明記し、ここにお礼申し上げます。

Abbreviations

- PV *Pramāṇavārttika of Dharmakīrti*
- PVBh *Pramāṇavārttikabhāṣya or Vārttikālaṅkāraḥ of Prajñākaragupta* (being a commentary on Dharmakīrti's *Pramāṇavārttikam*), ed. by Rāhula śāṅkṛtyāyana, 1953, Patna.
- (Ja) *Pramāṇavārttikālaṅkārikā of Jayanta*, P 5720.
- (Ya) *Pramāṇavārttikālaṅkārikāsūparisuddhināma of Yamāri*, P 5723.
- 『戸崎 上』 戸崎宏正『仏教認識論の研究 — 法称著『プラマーナ・ヴァーツルティカ』の現量論 — 上巻』大東出版社、S.54.
- 『仏教学序説』 『仏教学序説』山口益、横超慧日、安藤俊雄、船橋一哉、平楽寺書店、1961.
- 『葉』 葉阿月『唯識思想の研究 — 根本真実としての三性説を中心にして — 』国書刊行会、s.50.
- [稲見慈悲] 稲見正浩「ダルマキールティの「慈悲の修習」の議論」印度学仏教学研究 35-1, S.62.
- [稲見(上)] 稲見正浩「ダルマキールティによる輪廻の論証」(上)南都仏教 5 6号,S.61.
- [稲見(下)] 稲見正浩「ダルマキールティによる輪廻の論証」(下)南都仏教 5 7号,S.62.
- [梶山] 梶山雄一「中観派における十二支縁起解釈」『仏教思想史』第3号、平楽寺書店、S.55.
- [Franco] Eli Franco 'Dharmakīrti on Compassion and Rebirth' 1997, Wien.
- [Namai] Chisho Mamoru Namai 'TWO ASPECTS OF PARALOKSĀDHANA IN DHARMAKĪRTIAN TRADITION' Studies in the Buddhist Epistemological Tradition, Edited by E.Steinkellner, 1991,Wien.

PVBh (p.71,12-p.74,4) 和訳研究

最初に Synopsis を出し、次に簡単な説明をし、その次に本文の和訳研究をしていこう。

Synopsis of PVBh p.71,12-p.74,4

- 1 (p.71,12-71,13) 〈心は前の心と潜在力を因とすること〉
- 1.1 〈1の証明〉
- 1.1.1 (p.71,13 - 15) 〈心が生起するのは、潜在力や前の心が多様だからである〉
- 1.1.2 (p.71,16) 〈身体と心との関係も多様な習気によって説明される〉
- 1.1.3 (p.71,17-20) 〈夢の認識による多様な習気の証明〉
- 2 〈来世への移行〉
- 2.1 (p.71,22-28) 〈習気の力に依存した世間的活動は真実な身体と結び付くので非真実ではないこと〉
- 2.2 (p.71,28-29) ... 〈別の身体への移行とは老人の身体への移行の如きであること〉
- 2.3 (p.71,30-p.72,2) 〈敵者の反論を破しつつ、移行の定義を述べる〉
- 3 〈夢の認識を援用した移行の証明〉
- 3.1 (p.72,3-4) 〈移行は夢の中での身体の移行の如く真実である〉
- 3.2 (p.72,5) 〈敵者の非真実説を用いた、夢の認証への反論〉
- 3.2.1 (p.72,5-10) 〈非真実の1 (拒斥)〉
- 3.2.2 (p.72,11-16) 〈非真実の2と3 (短い時間の確立、非共通の知覚)〉
- 3.3 (p.72,17-18) 〈夢の認識が真実であるとは断言しないこと〉
- 4 (p.72,19-23) 〈心は身体を執着する等の特相を持ってすぐ移行する〉

- 4.1 (p.72,24-26) 〈移行は推理によって理解されること〉
- 4.2 (p.72,27-28) . 〈前世の修習によって執着されたこの世の身体には現量が働くこ〉
- 4.2.1(p.72,29-p.73,3) 〈4. 2の喩例による証明〉
- 4.3 (p.73,4-15) 〔反論1〕 移行は身体そのままの移行か、身体なしの移行であり、非真実な身体を許して証明すべきでないこと。〔反論2〕 死後はこの世からの分断であること〉
- 4.4 (p.73,16-18) 〈4. 3への反論。夢の認証による反証〉
- 4.5 (p.73,19-26) 〈身体を放棄することによるこの世の身体の実在〉
- 5 〈夢による論証の妥当性〉
- 5.1 (p.73,27-30) 〈夢を非真実だと容認した場合〉
- 5.2 (p.73,30-p.74,4) 〈夢を非真実だと容認しない場合〉

概 要

- 1 心は前の心と潜在力、言い換えれば種子という無明等を因としている。
- 1. 1. 1 そのような潜在力が前の心によって覚醒する時次の世への生まれ変わりがあ。何故ならば習気や覚醒させる要因が多種であるから。
- 1. 1. 2 身体のみが次の世への生起の原因ではありえない。
- 1. 1. 3 多種の習気は夢の認識が、様々な人間に様々な現われることによつて説明される。
- 2. 1 習気によつて次の世に生起を得ることは、性的享樂がそうであるように、真実な身体と結合する。
- 2. 2 習気によつて次の世に移行することは、老人への移行と同じである。
- 2. 3 [敵者]「移行はありえない。精血を質料因とするし、畜生等は人間より別の精血によつて生じるし、実際に移行は直接経験されないから。」幼児等が若者へ移行することは経験される。移行とは心が身体と共に生じていることである。

3. 1 異なった特相を有する身体への移行は夢中においても経験される。経験されることは虚偽ではない。
3. 2 [敵者]「夢中の移行は真実ではない。」
3. 2. 1 (非真実1) [敵者]「非真実とは覚醒知によって拒斥されることである。」夢は覚醒知によって拒斥されない。夢と覚醒知は区別されない。
3. 2. 2 (非真実2) [敵者]「習気は弱いので短い時間にだけ成立する。」習気は堅固であることがある。例外として夢中の神の指示などもある。(非真実3) [敵者]「習気はすべての人に共通ではない。」大地全体等の共通の認識がある。
3. 3 移行が真実であるかないかは相続の極成によってわかる。
- 4 生の最初における身体を取るという行動は、前世の修習によって形成された心を因としている。
4. 1 これは推理によって理解される。
4. 2 今世の身体を経験することがあるので推理が成立する。
4. 2. 1 [敵者]「過去世の身体は経験されない。」移行に随順した結果が知覚される。他の村よりやってきた人の場合の喜び等が、直接知覚されることなしに推理されるのと同様である。
4. 3 [敵者]「移行とは身体そのままの移行か、身体なしでの移行であるべきであり、非真実な身体によって移行があるべきではない。また死とはこの世からの分断である。あたかも夢を見ない者が完全に認識が分断されるように。」
4. 4 夢の認証は真実な認識より生じている。死によって真実な覚醒へと向かう。
4. 5 この世の身体の知覚は前世の身体の放棄に等しい。
5. 1 夢は真実な覚醒状態から生じたものである。いわば本有から生じた中有的なものである。
5. 2 夢と覚醒知とは如何なる相違もない。

1 (p71,12-71,13) 〈心は前の心と潜在力を因とすること〉

実に前の心[の相続⁽¹⁾]があることのみより、心が生じるのではない。何故ならば、その⁽²⁾ [心より] 他なる [もの即ち]、潜在力 (saṃskāra) [言い換えれば] 種子という名前を持つ⁽³⁾ 無明 (avidyā) 等を特相として持つものも因としてあるからである。

1. 1 〈1の証明〉

1. 1. 1 (p.71,13 - p.71,15) 〈心が生起するのは、潜在力や前の心が多種だからである〉

[主張] [生きる意向があることから⁽⁴⁾] その [潜在力が⁽⁵⁾] 前 [世] の心によって⁽⁶⁾ 覚醒する時、そこ [即ちこの世⁽⁷⁾] にあるいは別の所 [即ち他の世⁽⁸⁾] に、心を生起させる⁽⁹⁾。

(1) P74b8 では、snga ma'i sems kyi rgyun yod pa tsam であり、Skt. に直せば pūrvacitta-santāna-mātra となろうか。

(2) Tib. では de 欠。

(3) PVBh では saṃskāra-bīja-saṃjñita であるが、P75a1 'du byed kyi bag chags によって考えるならば、saṃskāra-vāsanā-saṃjñitasya かあるいは saṃskārasya vāsanā-saṃjñitasya となろうか。また (Ya)87a6 では、ma rig pa la sogs pa'i rang bzhin de nyid ni 'du' byed ces bya ba bag chags kyi sa bon yin no / という説明がなされるが、文脈から確定することはできない。

(4) (Ya)87a7 より入れる。

(5) (Ya)87a7 'du byed より入れる。

(6) (Ya)87a7 anga ma sems las によつて解釈する。

(7) (Ya)87a7 「そ [のこの世] の身体に」とする。

(8) (Ya)87a7 「他の生存に」とする。

(9) (Ya)87a7-8 も同様に解釈している。ここで pūrvacittaprabhodenā は、以前の心が覚醒することによって、ではなく、以前の心によって覚醒することによって、としなくてはならず、注意を要する。

[証因] 何故ならば、相違している諸習気⁽¹⁰⁾は多種⁽¹¹⁾であるし、[習気を]覚醒させる[要因] (prabodhaka) [は多種である] から。

[喩例] 例えば⁽¹²⁾睡眠⁽¹³⁾と結びつく⁽¹⁴⁾ [即ち就寝する] ことのみによって、[必ずしも、潜在力の覚醒によって] 多種の夢の認識があるというのではない [し、多種の夢の認識がある場合もあるという違いがある] 如く。

(10) (Ya)87a8 には、「(相違は何によってあろうか) と言うならば、(習気の力によって) 云々と考えられる」とあり、また (Ya)87a8-87b3 では「あるものが覚醒する時に、まさにその[の現在]の身体に、苦楽等を享受 (nye bar spyod pa) するような習気があるし、[一方] あるものが覚醒することによって、他の身体に苦楽等を享受するであろうある習気もある。そのうち第一 [の習気] は特定の補助 [因] によって、次々に起こるその身体へ対する生存への意向に基づいて、それぞれ先行する心に、心を [次の世に] 覚醒するし、第二 [の習気] は、急所 (gnad) の不調 (na ba) 等によって、生きる意向のある心に (las → la) 依存するから、前 [の識] とされる直前の心を覚醒させる」と習気を二種に解釈している。

(11) P75a2 sna tshogs D62b5 sna tshogs. また PVBhT(Ya)87b3-4 「そのように (習気という) 種子が語られたというのは、(多種) であると見られるというのである。無始の習気そのものが否定されるのは適切ではない」とあり、また (Ya)87b5-7 には「その多種の心は、対象が多種であることによって形成されるのではない。何故ならば [心は] 対象に関して空であるからである。[対象の認識による顕現は対象より] 他として現われるという主張がある場合でも、習気についての説は否定し難い。[しかし敵者が] 『その汝の言うように習気で説明される] ように、[対象がないので対象は] 近接 (nye ba) しないから、(1) 対象が現われないこと [になる] かあるいは (2) 整合する認識としてどうしてあろうか [、ありはしない、となるだろう]』とするならば、その [汝が言う] ような形相である認識の相続は、形成された ('dus byas) 特定な認識より生じる自我 (bdag) の属性 (yon tan) [に關すること] と理解されるべきである。また自我がないとするならば、等無間縁によって特定の能力があるから、習気的能力をもっているもの、あるいは形成されたものでも、いずれにしても [多種の心の証明に] 如何なる相違もない」とある。

(12) (Ya)87b4 「経験されるからということ語って (例えば) と言ったのである。これによって、多種な認識があると直接的に (dngos su) 説明している」とする。

(13) PVBh siddha-sambandha を P75a2 gnyid dang 'brel pa より middha-sambandha とする。

(14) (Ja)267b1-2 「心の性質である多種の習気より、身体と心等の多種性を経験することがあると説いて (夢と結びつくことのみによって) と言う」とする。

睡眠と結び付くこと⁽¹⁵⁾ [即ち睡眠状態になること] が [どんな人にも] 同じ [ようにある] としても、ある時、ある [特定の] 夢の認識がある [のは事実であるので、共通の夢の認識があるのではない]。何故ならば、[多種の夢が成立するのは] 習気を覚醒 [させる縁⁽¹⁶⁾] は [各人各様に] 多種だからである。

1. 1. 2 (p.71,16) 〈身体と心との関係も多種の習気によって説明される〉

実に習気⁽¹⁷⁾を覚醒 [させる縁] は多種だから [死体には心が⁽¹⁸⁾] 消滅する [事実が説明される]。他方身体のみが [生起の] 原因だとする場合にも、[(1) 心が

(15) PVBh siddha-samāgama を P75a2 gnyid dang 'brel pa より middha-samāgama とする。

(16) P75a3, D62b6, (Ya)87b7 より rkhyen を入れる。また Yamāri は (Ya)87b4-5 で「多種の習気があることが間接的に (shugs kyis) [言われている]。同じように習気を覚醒させる縁も比量されるべきである」と説明する。

(17) vosanā を vāsanā に直す。

(18) (Ya)87b8 より入れる。

生滅することあるいは(2)心が因であることが⁽¹⁹⁾ありえないから、必ずそのよう〔に(1)心の習気を因とすることあるいは(2)死体に心の消滅〕が経験されるから⁽²⁰⁾、どうして〔(1)身体のみを原因とすることあるいは(2)心のみを原因とすることが〕あろう⁽²¹⁾。

(19) Yamāri はこの *vāsanā-prabodha-citravād dhi nivṛttir na tu deha-mātra-kāraṇatve 'py evam eva dr̥ṣṭatvād iti kuta etat* という文章において、どの部分がどちらの主張かという問題に二つの解釈を出している。

(Ya)87b8-88a2 「師が」〈身体のみを原因だとする場合にも〉〔その身体が滅した時に〕心が〔その身体においては〕消滅することがあろう、と言う〔提言〕に対して、『身体のみが因であるから〔身体がなくなれば、身体による〕業もないし〔よって心は消滅してしまうだろう〕』と〔敵者が〕語っているのであって、〔死体には心が消滅するという後に〕〈合理(*yukta)〉〔という言葉〕が補われるべきである。〔身体のみを因とする時、死体に心が〕消滅する(*nivṛttir)〔ことがない〕〔という言葉〕も付け加えられる。他者による意義のない答えが〈必ずそのように経験されるから〉と言われる。〔それを〕批判して〔これはどうして〕と言われるを第一とする。この立場では、Prajñākaragupta が、人間が死んだ場合、心は身体より消滅すると言っているのに対して、敵者〔おそらく Cārvāka 派〕は、Prajñākaragupta の理論を逆に取り、身体が消滅すれば心も消滅してしまう、という論を立てている。即ち [Prajñākara] *vāsanā-prabodha-citravād dhi nivṛttir [*yuktam] [Prajñākara] na tu deha-mātra-kāraṇatve 'py [*nivṛttir] [敵者] evam eva dr̥ṣṭatvād [Prajñākara] iti kuta etat* となろう。

また (Ya)88a3-4 で「また『もし心が〔次の世に生じる〕因であ〔るならばその心の〕如く、身体のみが〔因である〕とも経験されよう。故にそ〔の身体〕が否定されても〔心まで〕否定しよう』と考える意図が〔敵者に〕ある場合(身体のみ)と〔師が〕語った。『心が因である如く、身体のみが〔因である〕とする〕時、心が因であると経験されないという意味である。他者によって〈これはどうして〉と聞かれている。身体のみが因であるとは成立しないのは、何故ならば、という意味で〔偈文が語られたので〕ある」を第二の解釈とする。この立場では Prajñākaragupta は来世へ生じるのは、心が原因であるとするのに対して、敵者は身体が原因であると言っているのである。即ち [Prajñākara] *vāsanā-prabodha-citravād dhi nivṛttir [Prajñākara] na tu deha-mātra-kāraṇatve 'py evam eva dr̥ṣṭatvād [敵者] iti kuta etat* となろう。

(20) Yamāri の第一の解釈による説明では (Ya)88a1 「他者による意義のない答えが〈必ずそのように経験されるから〉と言われる」とする。また (Ya)88a2 では「因であることが量によって成立しないし、拒斥だから、と密意されている」とする。

(21) Yamāri の第二の解釈では P75a4 zhe na (D62b7 zi na) とするべきであるし、第一の解釈では PVBh の *iti cet* 欠に従うべきである。

1. 1. 3 (p.71,17-p.71,20) 〈夢の認識による多種の習気の証明〉

夢の認識 [に夢の多様性がある] 如く⁽²²⁾、そう [心の習気の高多様性] がないならば⁽²³⁾ [認識の多種が経験されないから] 受け入れられないので、[多種の因となった⁽²⁴⁾] 心の習気を見ることによって⁽²⁵⁾、一切 [の認識⁽²⁶⁾] は、習気の覚醒を因として持っている⁽²⁷⁾。〈4 4 7〉

もし、身体と睡眠⁽²⁸⁾のみが [覚醒する] 因であるならば、すべてのものにとつてあらゆる時に⁽²⁹⁾、同じ夢の認識があるという矛盾となる。しかし [実際には] あ

(22) (Ya)88a5-6 「『そう [習気の覚醒] であるものより他でも、あるものによって、そ [の一切の認識] のようになることは、[習気の覚醒より] 他としては、(受け入れられない) 認識であるから』、習気は多種でないとはありえない、と確定する認識が、そういった認識であると考える時、(夢の認識 [の如く]) と考えられる」とする。

(23) Yamāri の第一の解釈では、(Ya)88a2-3 「(どうして) と言うならば、(そうでないならば) 夢中の多種の認識は (受け入れられない) からである」とする。また第二の解釈では PVBhT(Ya)88a4-5 「答えは、多種の心が、身体のみという因のみとは (受け入れられないからである)」とする。

(24) Yamāri の第一の解釈では (Ya)88a2-3 「(そう [多種の習気] でないならば) 夢において多種の認識は (受け入れられない) から」と説明する。

(25) Yamāri の第一の解釈では、(Ya)88a2 「自らの意図によって要約すると (心の習気) が多種であることが (na → ni) (経験される) とは、量によって確定がある。」また第二の解釈では (Ya)88a5 「多種で [心の] 因となった (習気を見る) とは即ち確定する場合 (一切の) 認識は (習気を覚醒する因をもっている) のである」とする。

(26) (Ya)88a5 より入れる。

(27) PVBh p.71,17

cittasya vāsanādr̥ṣṭer anyatānupapattitaḥ /
svapnavijñānavat sarvaṃ vāsanābodhakāraṇaṃ /447/

P75a4-5

de lta *min na mi 'thad phyir /
sems kyi bag chags mthong bas na /
thams cad rmi lam shes pa bzhin /
bag chags sad pa'i rgyu can yin /

*D62b7 より yin から変える。

(28) PVBh p.71,18 dehasiddha を P75b5 lus dang gnyid より deha-middha とする。また (Ya)88a8 「そこで、先ず例示に関連して (もし身体と) と言われる」と注される。

(29) (Ya)88a8 「その時 [という時間] から拡張させて (すべての [時間]) となる」とする。

るものにとって⁽³⁰⁾、ある[知覚⁽³¹⁾]が得られるからそれ(夢の認識)は習気に結び付いたもののみである、ということは道理である。何故ならば[その場合⁽³²⁾則ち夢中において]諸々の習気は多種の形相を有するから⁽³³⁾。それ故に、まさにすべての心は⁽³⁴⁾そ[の世]あるいは⁽³⁵⁾別[の世]の身体に習気が覚醒する作用を持って確立している⁽³⁶⁾のであり、[それより]別様には考えられない。

2 〈来世への移行〉

2. 1 (p.71,22-p.71,28) 〈習気の力に依存した世間的活動は真実な身体と結び付くので非真実ではないこと〉

- (30) (Ya)88a8-88b1「多種の認識が身体等という因を有するものとしてはありえない場合、習気のみが顕現させることが可能であることを説明して〈あるものにとって〉と言われる」と説明する。
- (31) P75a6 より入れる。しかし *cung zhig dmigs* 「少しの知覚」とある。
- (32) PVBh では欠。
- (33) (Ya)88a6-8 「例えば夢の多種の認識は身体を因とすることはありえないから、[夢の多種の認識は] 多種の習気が [身体を生じる] 因であると確定する (*nges pa*) 如きである) とするならば、その確定によって次々と (*pa* → *dang*) 後続する認識の原因もまた (多種な習気) であるが、身体のみ等が [因では] ないと確定がある。更に (Ya)88b1 「例示を説明して、前後を関連させて、それ故に 〈一切の心〉と言われる」。また (Ja)267b2-3 「多種の心等がまさにそれであっても、生の最初において習気が生じるべきであるから、〈例えばずっと以前の生の如く〉と説いて、それ故に 〈一切〉の〈心〉を有したものとと言われる」とする。
- (34) D63b2 *sems thams cad du* であるが、P75a7 *sems thams cad* , PVBh p71,20 *sakalam eva cittam* を採る。
- (35) PVBh p.71,20 では *ca* だが、P75a7 'am より *vā* か。
- (36) PVBh p.71,20 *vihitavyatikaram* を Tib. では P75a7 *byed pa dang ldan par gnas pa yin* と読むが、はっきりとはしない。しかし (Ya)88b1-2 では「それ故に 〈一切の心〉と言われる。(習気の覚醒) がされているのであり (確定しているのであり) とは、それぞれ互いに排除しあいながら成立している (**paraspara-parihāra-sthiti*) ののである。ある者に夢の認識がある如く、その如く別 [の者に夢の認識] はない」と説明する。

[敵者が⁽³⁷⁾]「習気の力によって生起を得る⁽³⁸⁾ことは、決して真実ではない。例えば夢の如く⁽³⁹⁾」と言うならば、それもありえない⁽⁴⁰⁾。[何故ならば]

[例えば] 性的享楽⁽⁴¹⁾等の戯論(世間的活動、戯れ)⁽⁴²⁾が、習気の力から生じたものであっても⁽⁴³⁾、自己の目的⁽⁴⁴⁾を完遂するから、非真実ではない。

(37) P75a7 では敵者の主張を示す場合 'on te とすることが多いが、D63b2 では gal te とする。以下この傾向はほぼ変わらない。

(38) PVBh p.71,22 utpattim āsādayat (生起に到達しつつある)だが、P75a8 skye bar 'gyur ba と訳している。

(39) (Ya)88b2-3「(しかし)とは、夢中で顕現する諸認識は〈習気〉のみより生じたから〈真実ではない〉と考えているのである」と説明する。

(40) (Ya)88b3「立論[者]が、習気によって生じても真実でないことはない、と示すことによって、[習気によって生じることが]非真実として成立するならば、習気より生じることとは否定であることを語って〈それも真実ではない〉と言われる」とする。

(41) P,D chags spyod と訳している。

(42) PVBh prapaścaḥ (前後の)は Tib. より prapañcaḥ とする。

(43) Jayanta は (Ja)267b3-4「結果の力によっても、[如何なる因もないから、同様にこの世の力によって]前世には如何なる因もないとする時[、その主張は]成立しないという、その一切は真実の如く構想されるべきであると説く者が〈習気のみより生じても〉と言う」と立場を異にする。

(44) (Ya)88b4「〈自己の目的(rang den → rang don)〉とは、楽と歓喜(等)である」とする。

真実な効果的作用によってなされている⁽⁴⁵⁾。⁽⁴⁶⁾ 〈4 4 8〉

性的享楽等という世俗が、実に習気の力に依存しつつあり⁽⁴⁷⁾、[自らによって]意図されて効果的に働く⁽⁴⁸⁾傾向を持って働く限り⁽⁴⁹⁾、それ等（性的享楽等という世俗）が⁽⁵⁰⁾どうして真実ではないだろう。どうして自ら自身を捨ててしまう作用⁽⁵¹⁾だろう⁽⁵²⁾。

たとえ性的享楽等という世俗が、習気に随順するとしても、その[性的享楽等の世俗]は実在の女性等と結び付くことから、[そのような事実があるから、実在の女性等と結び付くことを通じた性的享楽等という世俗が]真実ではないとい

(45) (Ya)88b4-5 「そうである場合、そうであっても、どうして真実性があるろう、と言うならば〈存在に関する効果的作用〉より、と言っている。分析して〈効果的作用〉よりの云々と言われる」とする。

(46) PVBh p.71,23

vāsanābalabhāve 'pi prapañcaḥ suratādikah /
nāsatyah svārthanīṣpatteḥ satyārthakriyākṛtām /448/

P75a8-75b1

chags spyod la sogs spros pa ni /
bag chags stobs las byung gyur kyang /
rang don bsgrub phyir mi bden *min /
yod **nyid don byed pas byas yin /

*D63a3 yin

** (Ya)88b4 では kyis とする。

ここで「真実な効果的作用」と PVBh に従うか「存在性という効果的作用」とチベット訳に従うかの問題がある。「性的享楽」は存在性と直接的に結び付かないので、PVBh に従った。PVBh の d では metre 不足。刹那滅論証として *sattā*, *arthakriyā* より考えることはできないであろう。そこで2通りの解釈が考えられる。即ち (1) *sattayā* — *kṛtatvam* あるいは — *kṛtataḥ* (2) *satyatā* — *kṛtatvāt* とが考えられる。c を解釈していると考えるならば (2) の方が妥当であろう。

(47) PVBh p.71,24 *avalabyamānā* は *avalavyamānā* に直す。

(48) (Ya)88b5 「熟すること (btso ba → ma) と燃やすこと等が指向されている、(効果性)を (なすこと) に与えており、およそ早く (働く) 諸のものにその言葉を語っているのである」とする。

(49) P75b1 では *nus pa* だが PVBh p.71,24 *pravaṇa* とし、こちらをそのまま採る。

(50) PVBh 欠、D63b4 de だが p75b2 de dag を採る。

(51) PVBh p71,25 *asatyatā-vyatikara-vyasta* は P75b2 *bden pa'i bya bas* と訳されているが、ここでは訳を確定できないが、取敢ずこのように訳しておく。

(52) [Franco] p.245,3 と異なる。

うことはありえない⁽⁵³⁾。〔来世への〕生まれ等という世間的活動もそ〔のように〕真実な身体と結び付く⁽⁵⁴⁾ から、同様〔に真実でないことはありえないの〕である⁽⁵⁵⁾。そ〔の生死〕の場合⁽⁵⁶⁾、それら〔生まれ等の世間的活動をする人⁽⁵⁷⁾〕にも〔真実な身体は、相互に相違を有しているから⁽⁵⁸⁾〕別〔な状態〕の実際の身体を捨てたり (utsarga) 受けたりすること (upādānatā) がある⁽⁵⁹⁾から、〔来世への生まれ等という世俗的活動は〕真実でないことはない。何故ならば、精血によって、生じた〔過去とは〕別の身体を受け取って、〔次の世に〕生⁽⁶⁰⁾が活動するから⁽⁶¹⁾。

2. 2 (p.71,28-p.71,29) 〈別の身体への移行とは老人の身体への移行の如きであること〉

〔敵者が〕「習気の⁽⁶²⁾、〔胎より生じる〕力〔によって、生存の言説〕があると

(53) nāsattyaḥ の後に / (daṇḍa) を入れる。

(54) (Ya)88b6 より入れる。

(55) (Ya)88b6-7 「〈同じで〉あると言ったのは、〈それらも〉ということであり、〈世間的活動も〉である」とする。

(56) (Ya)88b7 「〈その場合〉と経験されると願われていることは死と生であろう」とする。

(57) [Franco] p.245,8 「生まれ等」と解釈する。

(58) (Ya)88b7 より入れる。

(59) PVBh p.75,27 utsargopādānatā は、P75b3, D63a5 len pa dang 'dor ba と訳されるので utsargopādānatā とする。

(60) (Ya)88b7-8 「真実な相互の特別な身体を有しているから、およそ他となっているもの、その質料に、およそ世俗にある諸々の質料が、そのように言われる。その死〔後〕の心は、真実な身体と結び付くと経験されるだけである。〈生じる場合〉の心を語るならば、〈即ち〉と〔説明される〕」とする。

(61) PVBh p.75,28 janma-pravarttate は P75b4 skye ba 'jug pa より janmo pravarttate / とする。

(62) (Ya)88b8 「〔来世の生存について〕現在働いている言説を疑うのかあるいは子宮 (mngal) より生じる〔という疑い〕かが〔習気の〔力より生じた〕〕という論難である」とする。

しても⁽⁶³⁾、認識されることがなくても⁽⁶⁴⁾、どうして別の身体への移行⁽⁶⁵⁾があるう」と言うならば⁽⁶⁶⁾、[答えよう。それは例えば]あたかも[若者等の身体から、同質の]老人⁽⁶⁷⁾等の身体の状態への移行の如きものである⁽⁶⁸⁾。

2. 3 (p.71,30-p.72,2) 〈敵者の反論を破しつつ、移行の定義を述べる〉

[敵者が言う。]「もし⁽⁶⁹⁾ある特定の質料[因]の存在⁽⁷⁰⁾によって、そ[れに対応した]単一のものとしてある[身体]の確立があるから、まさにそ[の

⁽⁶³⁾ PVBh p.71,28-29 — vāsanābālabhāve 'pi / kathaṃ の daṇḍa の位置を P75b4 より bag chags kyi stobs las byung ba yin yang — により直す。[Franco] p.245,13-14 は PVBh によっている。

⁽⁶⁴⁾ PVBh p.75,29 anantareṇa だが、P75b4 dmigs pa med par を採る。また (Ya)88b8-89a1 「(認識されずに)とは、認識されない、からという意味であり」とする。

⁽⁶⁵⁾ (Ja)267b4-6 「前の生存よりこの世の生存に移行するということが、妥当な認識の能力によって成立する場合、比喻に基づいて明かであっても、大きな可能性を容認して説いて、例えば(他の身体へどうして移行しよう)ということから、(誤難が明かになる) (ltag chod を lhag tshod と読む。PVBh p.72,18 k452d) とする間までによって示しているのである。覚醒と夢の心等の相続に、[それぞれ] 真実と他方(即ち非真実)との区別がないことによって、習気所生であるので、果より因を比量するから、来世の成立を拒斥することは、決してないという意味であって」とする。

⁽⁶⁶⁾ PVBh 欠だが、P75b4 zhe na より入れる。

⁽⁶⁷⁾ P75b4 rgyan pa, D63a6 (Ya)89a1 rgan po

⁽⁶⁸⁾ [Franco] p.246,n.19 では別解 (Abhidharmakośa 等による) をしている。

⁽⁶⁹⁾ PVBh は欠。P75b5 gal te — だが、D63a6 gal te / を採る。また (Ya)89a1 「ここからは他者の説となる」とする。

⁽⁷⁰⁾ (Ja)267b6-7 「(ある質料[因]より生じたものである) 種子は水等と結び付くことによって (pa を pas に読む)、大きい、更に大きい等の状態になっても、相違がないではないか。[一つの質料因から生じたから、] そのように、身体も(子供)と(若者等)の状態として相違はないと考えることが(ある質料因であるものより)と[表現することによって説かれている]」とする。

認識されない身体]の如き他の身体へ移行することは決してありえない⁽⁷¹⁾。

(449)

[一つ目の理由] かの身体は必ずある一つの⁽⁷²⁾精血という質料 [因] を持っているから、[ある精血を持ったものが決まった身体より] 別の身体への移行はない。

[二つ目の理由] 他方⁽⁷³⁾ [更に人間より] 別の精血によって生じた、畜生等の身体は、[人間より] 他の身体である [からそれ等の身体への移行はない]。

[三つ目の理由] ましてや [直接経験される範囲の] 実存のもの (tathābhūta) [即ち肉体的に別な身体] については、移行が経験されない⁽⁷⁴⁾。どうしてそ [の移行] はありえよう」と言うならば⁽⁷⁵⁾ [答えよう。]

そのよう [に一つの身体に、ただ一つの精血という質料因を認め] ても⁽⁷⁶⁾、他の身体にあること (移行すること) を否定することはありえない⁽⁷⁷⁾ [。確かに] 異なった特相性 (変わること、vilakṣaṇatva) は⁽⁷⁸⁾、それであること

(71) PVBh p.71,30

ekopādānabhāvena tadekatvavyavasthiteḥ /
śarīāntarasañcāro na bhavaty eva tādrśaḥ /449/

P75b5-6

nyer len gcig gi dngos po yis /
de gcig tu ni gnas pa'i *phyir /
de 'dra ba ni **lus gzhan du /
'pho bar 'gyur ba ma yin no /

*P75b5 ro 有り。

**D63a6 gzhan nyid du

(72) PVBh 欠、P75b6 gcig より入れる。

(73) PVBh p.71,31 のみ tu あり。

(74) PVBh p.71,32 — na saṃcāro dr̥ṣṭas tat katham — を — na saṃcāro dr̥ṣṭas, tat katham — と読む。

(75) PVBh 欠。P75b7 zhe na より入れる。

(76) (Ya)89a2 「たとえ子供等の状態へある [1つの] 精血より生じることがあって [もが] (そうであっても) である」とする。

(77) (Ya)89a2 「(否定すること) とは、無 (としての可能性があるのではない)」とする。ここで Yamāri は 'gyur ba を 'byung ba に読んでいる。

(78) (Ya)89a3 「まず相違していることは否定が難しい。何故かと言うならば、(異なった特相性) と言うのである」とする。(Ja)267b8-268a1 「(答え) である (そうであっても、他の身体を否定することはありえない) と続いている。何故かと言うならば (異なった特相性) である、相違性がある [からである]」とする。

(同一であること)⁽⁷⁹⁾を、否定せしめるものであると、認められている⁽⁸⁰⁾。

(450)

何故ならば〔この世において成長した〕若者等の身体が、〔成長する前の〕幼児等〔の身体と特相〕が異なることによって、そ〔の身体〕は〔幼児等と若者等が〕同一であると言うことはできない⁽⁸¹⁾。〔しかし〕その〔幼児等が若者等へ成長する〕場合、移行は必ず経験される⁽⁸²⁾。そ〔の身体〕と共に移るものであること (sahacārin) によって⁽⁸³⁾、〔心が〕そ〔の身体〕へ生起することが、移行⁽⁸⁴⁾である。更に〔その来世への移行が〕習気の力によって⁽⁸⁵⁾、そのように生じるという⁽⁸⁶⁾〔主張に〕

(79) (Ja)268a1 「(それであること)とは同一であること (gcig nyid) である」とする。

(80) PVBh p.71,33

na śārīrāntaratvasya tathāpi vyatirekitā /
vilakṣaṇatvaṃ tattvasya nivarttakam *itiśyate /450/

P75b7-8

de lta na yang lus gzhan nyid /
ldog par 'gyur ba ma yin te /
mtshan nyid mi mthun pa nyid ni /
de nyid zlog byed yin par 'dod /

*itiśyate より変える。

(81) (Ja)268a1 「種子〔について〕も大きくなったもの等を〔種子より〕相違したのとして説いて (若者等の身体) と言う」とする。

(82) P75b8 yin te だが D63b2 yin を採る。

(83) P76a1 lhan cig sbyor bar だが PVBh p.72,2 sahaçāritayā と読む。

(84) P76a1,D73b2 'phos ba と過去形にしてあるが、PVBh p.72,2 saṃcāraḥ を採る。ここで移行の定義がある。また Jayanta の注 [(85) 参照] より tat と tatra を補う。移行の定義を簡潔に述べれば、「肉体を基準にして、心が身体とともに生じていること」である。

(85) (Ja)268a1-3 「(身体の如く、心も相違するのではないか。例えば移行の如く) と言うならば、そ〔の身体〕と共働するもの (lhan cig spyod pa) として〔心が〕言われたのである。それぞれ先行する心のみより生じる心もまた、その身体への渴愛 (sred pa) である習気の心を有しているから、〔その〕身体と共に生じるものとして説いて (習気の力によって) と言うのである」とする。

(86) P 欠だが、D63b2 zhes bya ba, PVBh p.72,2 iti を採る。

も⁽⁸⁷⁾矛盾はない⁽⁸⁸⁾。

3 〈夢の認識を援用した移行の証明〉

3. 1 (p.72,3-p.72,4) 〈移行は夢の中での身体の移行の如く真実である〉

〔敵者が〕「異なった特相⁽⁸⁹⁾ [を持っているという意味で] 別 [な状態の] 身体への移行は経験されない」と言うならば⁽⁹⁰⁾、そ [の汝の主張] も、夢の認識の中での身体への移行が経験される⁽⁹¹⁾ [という事実がある] から、不定である。

〔敵者〕「そ [の汝の言う夢の中の身体⁽⁹²⁾] は虚偽 (alika) ⁽⁹³⁾であるから、こ [の夢の中の身体] はそ [の夢の中の別の状態の身体へ] の移行⁽⁹⁴⁾は決してない」と言うならば⁽⁹⁵⁾、そ [のような汝の主張はありえ] ない。経験されつつあること⁽⁹⁶⁾が偽りであることはありえない⁽⁹⁷⁾から。

(87) PVBh 欠だが、P76a1 yang を入れて読む。

(88) (Ya)89a3-4 「子供より更に後に、嫁を娶るまでが若者である。その二人の体も同じでないという点で明かだから、[その] 場合必ず相違がある。相違して移行することも経験されるから、他の精血 (bu → khu) によって生じた [それぞれ] にも、どうして矛盾することがあろう、と意図されている」とする。

(89) D63b2 では rigs mi 'dra ba'i、P76a1 では de mi 'dra ba'i とする。また (Ya)89a4-5 は rigs mi 'dra ba とし「実際に同じでないもの」と解説する。

(90) P76a2 zhe na より入れる。

(91) (Ja)268a3 「(経験) とは直接的な認識 (nye bar dmigs pa) が存在することである」とする。

(92) (Ya)89a5 「老齢を有する者 (??rgas pa pa) が (それは) であり、(夢の身体) がそれである」として不明だが、訳文ではこのように解した。

(93) alika は普通 rdzun pa と訳される。med pa は訳しすぎか。

(94) PVBh p.71,4 では asāv だが、P76a2 の der を入れて訳した。

(95) P76a2 zhe na を入れる。

(96) (Ya)89a6 「(経験されつつあること) とは現量としての顕現、則ち現量を本性としているという意味である」。ここでは夢に妥当性を与えているが、これは Vasubandhu の『唯識二十論 (Viṃśatikā Vijñāptimātratāsīdhi)』の (svapnopaghātavat kṛtyakriyā /4ab/) を積極的に受け入れている論である。また PVBh の k459 参照。

(97) P76a2 mi rig pa だが D63b3 mi rigs pa を採る。

3. 2 (p.72,5) 〈敵者の非真実説を用いた、夢の認証への反論〉

〔もし汝が〕「そ〔の夢の中の身体⁽⁹⁸⁾〕が真実でない如く⁽⁹⁹⁾、そ〔の夢の中での身体の別の状態の身体へ⁽¹⁰⁰⁾〕の移行も〔真実ではない〕と言うなら⁽¹⁰¹⁾、真実でないというこれは、一体どういうことか⁽¹⁰²⁾。

3. 2. 1 (p.72,5-p.72,10) 〈非真実の1 (拒斥)〉

〔敵者が〕「〔真実ではないということは〕覚醒した〔状態の〕認識によって、拒斥されつつあること (bādhyamānatvam) である⁽¹⁰³⁾」と言うならば、およそある認識が〔夢の状態という条件で〕⁽¹⁰⁴⁾ある時、そ〔の認識の対象〕は〔覚醒した状態の認識によって〕拒斥されない。他方、それ以外の〔即ち覚醒した状態の〕時⁽¹⁰⁵⁾、

(98) (Ya)89a8 より入れる。

(99) (Ya)89a8 「上述の意味に対するこの答えは、確定が生じないから、論難を語って〈その如く〉という」。また (Ja)268a3-4 「〔敵者が〕〈それは例えば (yin は不明) 他に〔移行したもの〕とした場合、覚醒する時の知覚の如く、一切の知覚があるのではないのであって〕[と言う場合] それはどうしてか、と〔立論者が〕言うならば〔夢の認識が〕真実である場合〔のみ汝の説は成立する〕と考えて〈真実でない如く〉と言う」とする。

(100) (Ya)89a8 より入れる。

(101) PVBh の Tib. にも / (shas) がないが、校訂者 Rāhula に従う。

(102) (Ya)89a8-89a1 「上述の意味のみを質問するのが〈どうということか〉というこの意味のみであって、〔では一体〕〈真実でない〉というこれはどういう意味なのか」とする。

(103) (Ya)89a1-2 「〔真実でないこととは、〕(1) 拒斥すること (gnod pa nyid) か (2) 長い時間確立しないこと (yun ring du mi gnas pa nyid) か (3) 共通でないものの知覚 (thum mong ma yin par dmigs pa) である。そのうち最初で、顕現するという疑義に叶うのが〈覚醒した〉と言われる」とする。

(104) (Ya)89b2 「夢の状態にある場合である」とする。また (Ja)268a4-5 「〈拒斥と被拒斥と〉に違いはないと説いて〈ある認識のある時〉と言う」とする。

(105) (Ya)89a2 「覚醒の状態にある場合である」とする。

[その覚醒した認識が] 拒斥されるということはない⁽¹⁰⁶⁾。

[敵者が]「まさにそ[の夢の状態にある]時⁽¹⁰⁷⁾、覚醒した者による知覚 (upalabdhi) はない」と言うならば、[答えよう。] そのことによっても、覚醒した認識によって [夢の] 知覚は知覚されないから、[夢の認識と覚醒した状態の両者自身に] 等しく、被拒斥・拒斥の関係 (bādhyā-bādhaka-bhāva) がある⁽¹⁰⁸⁾。

[敵者が]「覚醒している時、どうして [夢の] 知覚がないだろう [、必ずあるだろう] ⁽¹⁰⁹⁾」と言うならば、覚醒 [している時] と覚醒していない [時] の区別がどうしてであろう⁽¹¹⁰⁾。[敵者が]『私は⁽¹¹¹⁾覚醒している』という認識が [覚醒時には] 生じるから [覚醒している時としていない時の区別がある] ⁽¹¹²⁾』と言うなら

- ⁽¹⁰⁶⁾ PVBh p.72,6 vādhyanta を bādhyata と読む。(Ya)89a6-8「あるもの (X) (例:月) から非真実となったもの (例:二月性) [がある場合]、それ (X) を拒斥することがどうしてであろう。現量を拒斥する働きがあるとすれば、他 [の比量] に対しても、どうして心が定まること (*āśvāsa) であろう。二月としての顕現は、必ず月の形相 (rnam ba) を有した識のみの形相である。そ [の識に現われている二月の顕現] を拒斥することはありえない。むしろ拒斥は、間違つて外部にあると思わせている二月性のみ働くのである。そ [の外界の月] は顕現しないと結び付けられる」と解説する。
- ⁽¹⁰⁷⁾ PVBh p72,7 tadā, D63a4 de nyid kyi tshe であり、P76a4 de nyid kyi は採らない。また (Ya)89b2-3「夢の状態にある場合である。夢の形態 (ris) [を持った顕現] でもある」とする。
- ⁽¹⁰⁸⁾ (Ja)268a4「(拒斥と被拒斥と) に違いはない」とする。
- ⁽¹⁰⁹⁾ (Ya)89b3「(どうしてだろう) とは他者の [説] である。夢の認識は覚醒している時、非知覚であると [他者が] 分別したのである」とする。また (Ja)268a5-6「しかし (前 [者の認識] を拒斥することによって、後 [者] の認識の生起がある場合、それは必ず拒斥を有している [と言うのである]。[しかし汝の説では] 後 [者の認識] は前 [者の認識] を拒斥しない。何故ならば [後者は前者から] 生じたものではないからである。前 [者] を拒斥することがない場合、後 [者] が生起することは成立しない) と [敵者が] 考えて、(何故ならば拒斥でなく、覚醒する時 [夢から生じたのだから] どうして非知覚だろう) と言うのである」とする。
- ⁽¹¹⁰⁾ (Ja)268a6-7「後 [者] が前 [者] を拒斥するとは、夢についてもありうるから、そ [の夢と覚醒知] も相違はない、と説いて (覚醒と覚醒していないとき) と言うのである」とする。
- ⁽¹¹¹⁾ (Ya)89b3-4「他者達が、特定の様相 (rgyu mtshan) を語って (私は) と言ったのである」とする。
- ⁽¹¹²⁾ (Ja)268a6-7「覚醒した者の心は夢と分離した本性を知らせるではないか、と考えて (私は覚醒しているという認識) と言う」とする。

ば⁽¹¹³⁾、「私は⁽¹¹⁴⁾覚醒している」という⁽¹¹⁵⁾認識が睡眠の時にもあるから、どうしてそ〔の実際に覚醒している場合〕からの区別があらう⁽¹¹⁶⁾。故に⁽¹¹⁷⁾〔夢の認識と覚醒した状態の認識とが〕同じ知覚⁽¹¹⁸⁾としてあるので（所量として）⁽¹¹⁹⁾、無いものあるいは（能量として）⁽¹²⁰⁾真実でないものに道理はない⁽¹²¹⁾。

3. 2. 2 (p.72,11-p.72,16) 〈非真実の2と3（短い時間の確立、非共通の知覚）〉

〔敵者が〕「〔非真実の2〕習気は力が弱いから、〔習気には〕短い時間だけに確立する⁽¹²²⁾性質がある⁽¹²³⁾。〔加えて〕〔非真実の3〕〔各人に〕不共の (asādhāraṇa)

(113) PVBh 欠だが、P76a5 zhe na より入れる。

(114) (Ya)89b4 「定説〔者〕がこ〔の説〕は確定〔でき〕ないと語って（私は）と言ったのである」とする。

(115) (Ya)89b7-8 「（私は覚醒した）と言う認識はそれよりあるのである」とする。

(116) (Ja)268a7-8 「夢の心もそのように自我 (bdag nyid) があると説く者が（私は覚醒しているという認識）と言う」とする。

(117) (Ya)89b4 「〈それ故に〉とは結論である」としている。

(118) P76a6 dmigs pas は D63a5 dmigs par とよむ。

(119) (Ja)268a8 「（無い）とは所量にとって、と〔いう意味で〕ある」とする。

(120) (Ja)268a8 「（真実でない）とは能量にとって、と〔いう意味で〕ある」とする。

(121) D の dmigs par mtshungs pa la med par ram *mi bden par rigs pa ma yin no の中で P にある * の / を取る。また (Ya)89b4-7 「覚醒と夢との2つの認識の知覚が〈同じである場合〉である。兎角の如く〈無いもの〉かあるいは〔二〕月の如く〈真実でないもの〉である。二月が真実でないとは、顕現しつつも拒斥するからであるという、誤った意見の經典に依存して語っているのである。「有」と「無」のうち〔所取である〕三蘊〔即ち受・想・行〕が無であるとする愚者（因果の法則に無知な者）の上に名声がある。故にもし顕現のみによって、「無」〔の立場〕に依存して、その場合必ず「有」である三蘊がどうしてあらう、と顕わしている〔主張〕を拒斥することさえありえない〔という結論になってしまう〕と語り終わっているのである」とする。即ち敵者は、三蘊は顕現はあるが無であるとし、ヤマーリは三蘊は顕現があり有であるとする。これは (Ya)89a6-8 を踏まえている。注106参照。

(122) PVBh p.72,11 では acarā だが、D63b6 では ring du mi gnas pa 「速くには成立しない」である。しかし意味としては yun ring du 「長い時間」であらう。P76a6 の ring du gnas pa はおかしい。

(123) PVBh のみ— sthāyitā とする。

[習気という因による] 知覚は弱い特相を持ち⁽¹²⁴⁾、[以上非真実とされる二点があるから、習気の力より移行が成立することは] 真実ではない⁽¹²⁵⁾と言うならば⁽¹²⁶⁾ [答えよう]。しかし⁽¹²⁷⁾ [反論1] 習気が堅固である時、逆 [則ち長い時間に確立する] ということから⁽¹²⁸⁾ 移行は真実である。[反論2] また⁽¹²⁹⁾ [大地全体等の] 共通の (sādhāraṇa) [因による] 認識⁽¹³⁰⁾がある時 [移行は真実である]⁽¹³¹⁾。

(124) Tib. では compound の bahubrihi とはしない。

(125) (Ja)268a8-268b1 「しかし 〈覚醒している時の飲食物 (bza 'dung) の認識という効果的作用は、夢の中で引き続き働く (?rjes su 'gro ba) し、覚醒している時は、言葉等を認識するから、[覚醒した状態の認識は] 必ず真実なのである。[しかし] 夢の中で認識の状態にある時、[覚醒した状態まで] 引き続き働くことはないのであり、それ故に [夢の認識は] 真実ではないと考えて (しかし習気の力が弱いから) と言われる」する。また (Ya)89b7-8 「[三種類の非真実のうち] 残り二つの選択肢の疑義に合うのが 〈しかし〉 言い、〈と〉 とまとめて言ったのである。その意味は、次のようである。〈習気の弱い力〉 によって、作られた認識の弱い力 [によって]、指示された遠くに確立はしないこと、(加えて不共の認識) であるもの、そういった夢の認識にとって (非真実) 性があるが、[この場合] 〈無いこと〉 あるいは (偽り [即ち真実でないもの]) であることとなる。何故ならば、[睡眠と覚醒の状態では同じ] 認識がないから、ということである」とする。三種類の敵者が出した「非真実」は (Ya)89a1-2 に述べられている。注103参照。

(126) PVBh 欠だが、P76a7 zhe na より入れる。

(127) PVBh 欠だが P76a7 'on を入れる。

(128) D63b6 「そ[の敵者の説]を否定するから」と訳される。

(129) Tib. 訳によれば (P76b7, D63b6) 「習気が堅固であり、共通の知覚である場合」と両条件を並列にする。

(130) (Ya)90a2-3 「(共通な認識) ということでも、あるものに堅固な習気がないとされるとき、(そ[の説]を否定するから、移行 [は真実] である) と言って正しい。(共通な認識) とは、他 [の修習] によって大地全体 (地遍 prthivī-kṛtsna) 等の認識がある如く、今の時間 (da riñ) [のみ]、生じたとしても、認識である夢は、そのよう [に非真実] ではないという意味である。それらを要約して私 [という立場の Prajñākaragupta 師] は 〈即ち〉 と言ったのである」とする。

(131) (Ja)268b1-2 「そうである時、未来の実体によって非真実であるが、自性によって [非真実であることは] ない、と示して (しかし習気が堅固である時) と言われる」する。また (Ya)90a1-2 「(堅固な習気) とは、堅固な習気によって作られた (遠くに確定する) 性質を語っていると望まれる。[弱い習気の] 否定が真実である。性質 (dharma) が移行すること [が真実なの] は、移行した個人 (dharmin) が真実だからである、と意図している」とする。

即ち、習気が堅固だから他〔の世へ〕の非眞実な生起はない⁽¹³²⁾。習気が堅固であることのみによって、覚醒している者の諸認識〔がありそれ〕は眞実である⁽¹³³⁾。(451)

習気が堅固である時、その覚醒〔した状態〕の認識は、眞実であり⁽¹³⁴⁾、共通の〔因による〕知覚を持っている⁽¹³⁵⁾。そ〔の覚醒の認識〕は〔その⁽¹³⁶⁾〕自相としてもあろうし⁽¹³⁷⁾、それ故に移行が成立する⁽¹³⁸⁾。他方⁽¹³⁹⁾、〔習気が〕堅固でない時⁽¹⁴⁰⁾、

(132) ここでは PVBh の 'sattya- によって訳したが、Tib. では「他〔の世へ〕の眞実な生起はない」とする。また (Ya)90a3 「眞実でない世間的な活動が生じることが〈非眞実な生起〉であり、こ〔の堅固な習気〕から生じる」と〈眞実な生起〉と〈眞実でない生起〉と二種類に分けて説明しているようであり、Yamāri の説明は Tib. 訳の立場を取っているかもしれないが、説明が途中で終わっているので PVBh によった。

(133) PVBh p.72,13

tathā hi vāsanādārḍhyān na paro 'sattyatodayaḥ /
vāsanādārḍhyamātreṇa satyatā jāgrato vidāṃ /451/
P76a8
'di ltar bag chags *brtan pa las /
bden pa'i skye ba gzhan yod min /
bag chags brtan pa tsam gyis ni /
sad pa'i rig pa bden pa yin /

*D63b6, brten だと、すべて「習気への依存」となってしまうので採らない。

(134) D63b7 bde ba だが、P76b1 bden pa , PVBh p.72,14 sattyaś を取る。

(135) (Ya)90a3-4 「(共通な知覚)とは、この場合、共通ではないという認識という作用があるのであり、有財積 (compound, 'bru mar po) である」とする。

(136) P 欠、PVBh 欠、(Ja) 欠だが、D 63b7 de'i がある。

(137) (Ja)268b2-3 「自相であるということについて、眞実であることに依存して〈移行は眞実である〉という説明にうまく合致したこと (nye bar bsdu ba, 文中二つある bar を一つ取る) が、(それは自相として) と言われる」とする。

(138) (Ya)90a4-5 「ある場合に、前世の状態を有していても、[今世に] 覚醒した認識には自相性があるが、眞実として過去は〔実体が〕ないと示して (故に移行が成立する) と言われる」とする。

(139) Tib. にはないが、PVBh p.72,15 tu を入れる。

(140) PVBh p.72,15 dārḍhyābhāvāt (D64a1 brten pa med pa ni) であるが、P76b1 brtan pa med na ni を採用して dārḍhyābhāve と読む。また (Ya)90a5 「〔敵者が〕 (夢の認識がどうして眞実ではないだろう) と言うならば、(堅固 (bstan を brtan と読む) でないとき) と言われる」とする。

すぐに〔移行を〕離れる (vighaṭanam) ⁽¹⁴¹⁾。しかし〔外的に〕夢の認識の〔習気が堅固である場合とない場合の〕どちらにとっても⁽¹⁴²⁾、神の指示が現われる時、どうして非真実だろう⁽¹⁴³⁾。

3. 3 (p.72,17-p.72,18) 〈夢の認識が真実であるとは断言しないこと〉

〔敵者が〕「〔汝は〕その場合〔夢の認識を〕真実であると言うが⁽¹⁴⁴⁾、そう〔汝が夢の比喩をもって他の世への移行を証明する〕場合、夢の対象がすべて非真実ではない（即ちすべてが真実）だろう⁽¹⁴⁵⁾。」〔と反論するならば、答えよう。〕そう

⁽¹⁴¹⁾ [Franco] p.249,1-2 では多少理解を違える。

⁽¹⁴²⁾ [Franco] p.249,3 は「二人の夢を見る者」としている。

⁽¹⁴³⁾ (Ja)268b3 「〔果である〕夢中の認識は、〔因が〕共通なものであっても、真実な原因であると説いて（神の指示がある場合）と言われる」とする。また (Ya)90a5-90b2 「その〔の習気が堅固でないこと〕のみによって、夢は真実でないと言葉を発しても、〔夢という〕場がなくなることはないのである。何故ならば、そのようなことはありえないからである。夢にとって〈真実でない〉と確定することが〈ない〉と語って、〈ある場合〉と言い、即ち夢の状態としてある〔と言う〕。〔習気が堅固である場合と堅固でない場合の〕両方の場合とも、共通なものとして、そのように顕現するのであり、何故ならば、論書という乗等を飲むことによって、病気の鎮静等を知覚するからである。〔因〕果の相続に依存して、遠くまで結び付くこともあるから、その場合、どうして〈非真実〉だろう。〈その時、真実である〉と言うのは、〔習気が堅固である場合とない場合の〕両方にとって、夢として経験される形相の時である。そのように堅固な習気を有した夢として、異種の身体への移行は真実であるから、相違が説かれているのである。故に移行する心が、堅固な習気を有していること、それが真実であって、例えば赤子〔の身体〕より若者の身体への移行の如きである。前世〔の身体〕よりこの世の身体への移行するこの心も、堅固な習気を有している、というのが自相である。ここで〈移行することがあることを以前に記憶したから、若者の身体への移行することが真実である〉ということを排除している」とする。

⁽¹⁴⁴⁾ PVBh 欠だが、P76b2 zhe na. [Franco] p.249,6 はここまです敵者説として取っている。

⁽¹⁴⁵⁾ (Ya)90b4-5 「〔敵者によって〕もし「夢の状態に生じるから同様な夢の身体は真実な移行であろうが、〈生の最初〉はありえない。何故ならば〔覚醒の状態の認識は〕否定されるから」と批判的難題が考えるならば、〈そうであるならば、夢の一切の対象は非真実ではない〉と言われる」とする。

[夢の比喻によって他の世への移行を証明した] 場合⁽¹⁴⁶⁾

相続 (sañcāra) が極成するから⁽¹⁴⁷⁾、[移行が真実であるか非真実であるかの] 相違を遍く知るから⁽¹⁴⁸⁾、[汝の説には] まさにこのような分別相似 (vikalpasama)⁽¹⁴⁹⁾ という誤難⁽¹⁵⁰⁾ が鮮明になる⁽¹⁵¹⁾。〈4 5 2〉

4 (p.72,19-p.72,23) 〈心は身体を執着する等の特相を持ってすぐ移行する〉

- ⁽¹⁴⁶⁾ (Ya)90b2 「主題に適合するから 〈そうである時〉 と言うのである」とする。
- ⁽¹⁴⁷⁾ (Ja)268b3-4 「それは、このように夢としての認識があるから、移行のみを成立させる場合、長い時間確立することと、別なもの [即ち非共通なもの] によって真実・非真実なものとして [敵者が] 相違して分別することによって、その否定的分別と同じであると説いて、〈移行が極成するとき〉 と言った」とする。また (Ya)90b2-3 「〈移行〉 とは、移行のみが真実であるから、[則ち移行した後] 相違を 〈極成することによって〉 である」とする。
- ⁽¹⁴⁸⁾ (Ya)90b3 「〈相違を分別するから〉 とは、記憶を有しているからということを [示している] とし、また同じく (Ya)90b5-6 「〈相違して分別するから〉 というのに夢等が、相違を相違して分別するからである。付け加えられる [言葉] は、〈以前語られた如く〉 である。移行が成立することを認める他の説明の場合にも、と言われる」とする。
- ⁽¹⁴⁹⁾ (Ya)90b3 「〈分別相似〉 とは、[相続したものが] 前 [者] の如く、同じ性質であっても、相違 [していること] を語って 〈分別相似〉 と [言うのである]」 とする。
- ⁽¹⁵⁰⁾ P76b3 lhag tshod より解釈して読む。またこの箇所は [Franco] p.249,n.30 より知識を得た。詳しくはそちらを参照されたい。
- ⁽¹⁵¹⁾ PVBh p.72,18

sañcārasya prasiddhatvāt viśeṣaparikalpanāt /
vikalpasamam evaṃ hi jātyuttaram idaṃ sphuṭaṃ /452/
P76b3
'pho ba rab tu grub bas ni /
khyad par yongs su rtogs pa'i phyir /
de lta 'di ni rnam rog dang /
mtshungs pa'i lhag tshod yin par gsal /

あるいは[別の解釈を述べれば⁽¹⁵²⁾]生の最初において、心の潜在印象 (samskāra) による[次の世へ移行するという]鋭い⁽¹⁵³⁾果を知覚するから⁽¹⁵⁴⁾、死してすぐ移行⁽¹⁵⁵⁾ [がある]と知られる。[即ち]

身体を執着する⁽¹⁵⁶⁾特相を持った心は、身体を有した者達の、生の最初において、生起が経験される時、どうして他の身体を知らない(即ち他の身体に移行しない) ことがあろう⁽¹⁵⁷⁾。(453)

先ず生の最初⁽¹⁵⁸⁾あるいは⁽¹⁵⁹⁾ [生の] 別の時に、一切の生物の心のこの本性 (svabhāva) は、身体を執着する等の特相を有しており、各々の次第を有して(即ち順次

(152) (Ya)90b4 「(あるいは) と続けるのは、[師が] 語ってすぐ後 [語る] ことであるから。例示するならば、例えば堅固な習気を有している夢の身体への移行の如く、と ((Ya)131a7 とは) 別様に [言わ] れる」とする。

(153) PVBh p.72,19 pāṭava を取って P76b4 gsal ba は取らない。

(154) (Ja)268b4-6 「[実際の前世より] 別の対象の如き修習は相違しているが、[特定の前世より] 生じたものは認められるのであって、[生まれ変わることは?] 甚だ大きいと経験されるから、前世より移行した状態 ('phos ba) が比量の対象であると説いて (生の最初において、心の潜在力による果) と言われる。長い時間確定しないことによって、意識 (gzung ba) に錯乱があっても、習気が生じるべきであるということを拒斥することはいえぬから、例示となっているものを、以前に説いて今は意識に錯乱がないと、相違した [例示] を [説いているのである]」とする。

(155) PVBh p.72,19 は Tib. より maraṇānantaram と読む。また PVBh p.72,19 では samcāra のみであるが、P76b4 では、'phos pa と過去形にする。

(156) (Ja)268b7-8 「(顕現) とは認められる相違であり、修習が生じられるべきと認められる相違を有していることである。[それは] この世において修習がないから、前 [世] 修習を有していると認識しているのであり、それ故に移行しているという知の対象を説いて (身体を執着する) と言われるのである」とする。

(157) PVBh p.72,120

śārīrāgraharūpasya cetasaḥ sambhavo yadā /
janmādaū dehinām dr̥ṣṭaḥ kin na dehāntarāgatiḥ /453/

P76b4

lus la kun 'dzin rang bshin sems /
lus can rnam kyī *dang po yi /
skye bar gang tshe 'byung mthong na /
lus gzhan ji ltar rtogs ma yin /

*D では dbang po だがおかしい。

(158) (Ja)268b8 「(先ず-最初の) とは結果であって、遍是宗法である」とする。

(159) PVBh p.72,21 ca だが P76b5 'am と読む。

で) あるので⁽¹⁶⁰⁾、前 [世] の修習の⁽¹⁶¹⁾次第の果性として知覚されつつある [が、その本性は] 身体を執着する前 [世] の修習⁽¹⁶²⁾が形成された⁽¹⁶³⁾心、⁽¹⁶⁴⁾なしではありえないから、まさにそれ (一切の生物の本性) は間接的に⁽¹⁶⁵⁾他の身体からこの [世の] 身体への移行⁽¹⁶⁶⁾があると理解されるべきである⁽¹⁶⁷⁾。そう [一切の生物の本性によって、移行が成立するとするの] でなければ⁽¹⁶⁸⁾ [移行に関する] 推理が働かないから。

4. 1 (p.72,24-p.72,26) 〈移行は推理によって理解されること〉

[敵者が]「移行することについて、[現量がない時推理はないのに] 現量はない。故にどうして推理による理解があろう。」[と言うならば、答えよう。] こ [の私の

- ⁽¹⁶⁰⁾ PVBh p.72,22 tāratamyayogī だが、P76b6 khyad par gyi rim pa dang ldan pas , D64a4 khyad par can gyi rim pa dang ldan pas と相違がある。
- ⁽¹⁶¹⁾ (Ja)268b8 「〈前 [世] の修習の) とは、成立されるべき [主題] である」とし、また (Ya)90b6-7 「〈修習〉より (相違して) あり、〈生の最初〉のように確立しているとは、これを語ることによって、認識終わっているけれども、そのものと結び付いた在り方となっているのである」とする。
- ⁽¹⁶²⁾ (Ja)268b8-269a1 「それを把握することもあると説明するとき、それはこのように後に遍充が成立するという場合、相違の成立は比量の果であると説いて 〈前 [世] の身体を執着する修習) と言われた」とする。
- ⁽¹⁶³⁾ PVBh p.72,22 では saṃskṛta だが、P67b7 では mngon par 'dus byas pa で abhisamṣkṛta となろう。
- ⁽¹⁶⁴⁾ P,D 欠だが、PVBh p.72,22 cittam を入れる。
- ⁽¹⁶⁵⁾ PVBh p.72,22 tatsāmarthyād を Tib. ではそれぞれ P76b7 de zhugs kyi , D64a4 , (Ja)269a2 の de'i zhugs kyi と訳す。また (Ja)269a1-3 「否定の説明から肯定の説明 [に向かわせるの] が 〈その間接的に) と言われ、この世で修習はないということである。生じられるべき修習の構造は前世における修習があることを成立させることによって、移行を成立させているのである、という意味である」とする。
- ⁽¹⁶⁶⁾ PVBh p.72,23 saṃcaraṇa のみだが、P67b7 'phos ba と過去形にする。
- ⁽¹⁶⁷⁾ P76b7 yin no te は yin te に読む。
- ⁽¹⁶⁸⁾ (Ja)269a3 「遍充を成立させないことによって、比量が働かないことを説明して 〈そうでないならば) と言われる」とする。

立論]も過失はない⁽¹⁶⁹⁾。何故ならば、

[逆に] 推理されるもの⁽¹⁷⁰⁾にも現量はないので⁽¹⁷¹⁾、この場合どうして過失⁽¹⁷²⁾がある。何故ならば、推理の対象は現量の対象⁽¹⁷³⁾ではないから⁽¹⁷⁴⁾。

(454)

実に現量と推理は、相互の対象を遮断することによって⁽¹⁷⁵⁾、働きが必ず許され

(169) (Ya)90b7「相違さえも語って〈移行することについて〉と言われる」とする。また (Ja)269a3-5「果より因を分別する如く、その〔特定な〕場所と時間からあるのであって、〔それより〕別の場所と時間よりあるのではない、とそれのみの比量をはたらくのではないか〔と敵者が言う〕。それが必ずここに移行することはできないと考えて〈しかし移行することについて現量がないから〉と〔敵者が〕言うのであり、即ち移行することについて、相違を捉えることがないという意味である」とする。

(170) (Ya)90b7「〈どうして〔過失がない〕と言うのか〉と言うならば、〈推理の対象〉と言われる」とする。また PVBh 欠だが P67b8 'ang を入れて読む。

(171) (Ja)269a5-6「果を因のみと分別する場合、移行はないのである。何故ならば相違した因を対象としているからである。同一の相続の場合、その〈過失のない〉ことを説いて〈推理の対象にも現量は〉と言ったのであり、果である心より因である心を分別しているというこ〔のこ〕は真理であるから、同一の相続を捉える対象であるから、移行のみが対象であるという意味である」とする。

(172) PVBh p.72,25 では *dr̥ṣṭatā* であるが、意味の上から P67b8, (Ya)90b7 の *skyon* を採り、*doṣatā* とする。

(173) P77a1 では「現量の身体と結び付く」としているが、(Ya)90b8 によって、これは *yul* とした方がよい。

(174) PVBh p.72,25

anumeye 'sti nādhyakṣam iti kaivātra doṣatā /
adhyakṣasyānumānasya viṣayo viṣayo na hi /454/
P76b8-77a1
rjes dpag bya la'ang mngon sum ni /
med phyir 'di la skyon ci yod /
rjes dpag yul gyi mngon sum gyi /
lus du 'gyur ba yod ma yin /

**yul* だろう。

(175) (Ya)90b8「およそ〈現量の対象〉であるもの、それは比量の対象ではない。〔現量と比量とは〕〈互いに〉対象を〈遮って〉確立しているからである。このことを説いて〈現量と〉と言うのである。それこそが、相互に排除して確立する〔事〕である」とする。

ている。[それ故に] どうしてそ [の私の主張] が過失であろう⁽¹⁷⁶⁾。

4. 2 (p.72,27-p.72,28) 〈前世の修習によって執着されたこの世の身体には現量が働くこと〉

[敵者が]「そういった [同じ] 種類に⁽¹⁷⁷⁾ [移行することに対する] 現量の働き⁽¹⁷⁸⁾なしで、どうして推理があるろう」[と反論するならば、答えよう。] そ [の私の主張] にも過失はない。[何故ならば]

先ず [この] 身体にあるいは別の [身体へ⁽¹⁷⁹⁾の移行も道理である⁽¹⁸⁰⁾。がその身体を] 執着することは、[前世の] 修習より働く⁽¹⁸¹⁾。

[よって執着された身体自体は] 現量によって知覚があるから、どうして推理がないだろう⁽¹⁸²⁾。〈4 5 5〉

(176) P77a1 - ci ltar skyon yin 'ong te -だが D64a6 - ci ltar skyon yin / 'ong te -を採用する。

(177) PVbHt(Ja)269a6-7「(移行の果として ('gar を gar とする)、わずかな知覚が [あるなら] どの場合でも、この世より] 他として知覚する場合、移行があると [立論者は] しているのではないかと [疑い、即ち移行する場合、同一の相続ではなく] 共通なものによって [相続] があるではないか、と [敵者が] 考えて (しかし同じ種類に) と言われる」とする。

(178) D64a7 では mngon sum du 'jug pa 「現量としての働き」とする。

(179) (Ya)91a1「([この] 身体あるいは別の) 場所 [という言葉] によって、[この身体を] 初めとする [あらゆる身体] についても (道理) であり」とする。

(180) PVbH 欠だが、P77a2 rung を入れる。

(181) (Ya)91a1「(執着すること) は (修習) のみの知覚である」とする。

(182) PVbH p.72,28

āgrahas tāvad abhyāsāt pravṛtta upalabhyate /
śarīre 'nyatra vādhyakṣāt tata evānumā na kiṃ /455/

P77a2-3

re shig lus gzhan du'ang rung /
kun 'dzin goms pa las 'jug par /
mngon sum gyis dmigs de nyid las /
ci yi phir na rjes mi dpog /

4. 2. 1 (p.72,29-p.73,3) 〈4. 2の喩例による証明〉

それについて次のように〔敵者によって〕言われる⁽¹⁸³⁾。

〔敵者が〕「その場合〔前の身体を〕現量することはありえないだろう。よってそういった〔同じ〕種類について現量なしで、どうして推理することがあろう。〔何故ならば〕推理は現量が先行するものだから⁽¹⁸⁴⁾。」と言うならば⁽¹⁸⁵⁾、その場合次が答えである⁽¹⁸⁶⁾。たとえ⁽¹⁸⁷⁾現量によって移行が経験されないとしても、移行に随順

(183) D では / shas 欠。また (Ya)91a1-2 「故に前〔世〕の修習が成立されるべきであることに依存して、主題となっていることは実体 (dkod pa) がないから、生の最初〔の身体〕を執着する経験がある〔からその〕ことのみより、生の最初のついて、移行が（どうして推理されないだろう）。語り終わっている論難をはっきりさせて（次のように言われる）と言われる」とする。

(184) (Ja)269a7-269b1 「〔顕現が〕認められた相違が〔この〕身体あるいはそ〔の別の身体〕で、補助することもある修習が〔比量に〕（先行している）と知覚するとき、〔この場合〕比量を働かせるから（同じ種類）に現量として働かないことがない、と説いて（先ず〔この〕身体にあるいは）と〔師によって〕言われている。しかし敵者が〕〔この世〕の身体に顕現が求められる相違は、修習の心が〔比量に〕先行している）と知覚があるが、他の身体にはないのではないか。そこで移行が認められていると考えて〔Prajñākaragupta 師によって〕（どうしてその〔同じ〕種類に）と言われる」とする。

(185) PVBh 欠だが、P77a3 zhes を入れる。

(186) (Ya)91a2-3 「その過失もないとされることをはっきりさせて（そこで次が答えである）と言われる。」とする。また (Ja)269b1-3 「（答え）が（たとえ現量によって移行が経験されないとしても、移行に随順した）と言われる。即ち修習により生じられる事物は、こ〔の世〕の身体を修習しないことによって、前世の身体の修習があると分別することによって、移行を分別している、と語っているという意味である」とする。

(187) (Ya)91a3 「一つの区切りをなすのに関連して（たとえ）と言われる」とする。

した (anurūpa) 果⁽¹⁸⁸⁾が知覚されることもあろう。例えば⁽¹⁸⁹⁾他の村 [へ⁽¹⁹⁰⁾] の移行の如く。それは例えば他の村からあるいは他の場所からやってきたもの (āgata) であり、前 [の村や場所] の大きな喜び (abhirati) という対象と同種のものが、援助 (upakaraṇa、補助因) 等がある場合、[現在も] 歓喜しつつあるものとして知覚がある如く。実にもし他の者に、「かくかくの (tathābhūta) 他の村からやってきた」という知覚がない場合、そ [のような知覚がない] としても、「これはかくかくの場所よりやってきた」という知覚が推理よりあることもあろう⁽¹⁹¹⁾。同様に、援助等が相違した場合に大きな喜び⁽¹⁹²⁾によって、神等の⁽¹⁹³⁾世界よりやってきたとも⁽¹⁹⁴⁾推理されるべきである。何故ならば他の村からやってきた者について、現量の働きのみによって、推理が働く [という事実が経験される] から。

[敵者が]⁽¹⁹⁵⁾「[例えば煙から火を推理する場合] 実に煙から推理されつつあり⁽¹⁹⁶⁾、

- (188) (Ya)91a3-5「(果が) とは、執着する等 [の身体等] である。故に執着するこ [の身体] の前 [世] で修習されているまさにその [身体その] ものは、この前の心より生じたのである。移行の対象はこ [の執着する身体] のみであって、[前世と今生の] 中間の状態の如きである。故に移行する心を (現量) としてなされている (即ち直接知覚されること) は、有効性がない。[身体を] 執着する修習は先行しているものは自我より経験されるのである」とする。
- (189) (Ya)91a5-6「そのように、一般的移行の比量を完成して [その後] に相違した [移行を] 成立するから、他の境涯 ('gro ba gzhan) への移行の例示を語って (例えば) 云々と言うのである」とする。
- (190) P77a4 では grong gzhan du 'pho ba 「他の村への移行」としているが、後の議論からすれば nas であろう。
- (191) (Ya)91a6-7「例えば、無という相違 [がある、即ち相違がないならばそのこと] から、まさにこれがある似たものから (やってきた) と分別する如く、その如く楽と清浄という因が有効であるとき、歓喜 [として知覚する] ので、[歓喜という] 補助 [因] の相違 [がある] から、これは、このような [楽と清浄という] ある世界より生じたと確定するのである」とする。
- (192) PVBh p.72,33 abhirasād を abhiratād とする。
- (193) PVBh p.73,1 lokād とするが、P77a7 lha la sogs pa'i 'jig rten nas より直す。また (Ya)91a7-8「たとえ (神等の) 境界より他 [の世界] へやってきた、と経験しなくても、このような相違がどうしてあろう、と考えられる時、(他の村よりやってきた場合) と考えられる。これによって例を語っているのである」とする。
- (194) P77a7 rjes su dpag pa la だが、D64b4 rjes su dpag pa を採る。
- (195) [Franco] p.263,6 は「火のみに」より敵者説とする。
- (196) PVBh p.73,1-2 anumiyāmānagna は、anumiyāmāna agna か。また P77a7-8 rjes su dpag par bya ba としている。

[煙からは] 相違を有した⁽¹⁹⁷⁾火には現量は働かない[であろうから汝の主張の場合現量はないだろう。もし現量が働くとするなら] 火のみに⁽¹⁹⁸⁾ [直接] 働く [べきだろう]⁽¹⁹⁹⁾。』と言うならば [答えよう。] この [汝の反論の] 場合も⁽²⁰⁰⁾ 身体等へ移行する場合、[現量が] 働くということから、これは⁽²⁰¹⁾ [火を見ることと] 同じである。

4. 3 (p.73,4-p.73,15) <[反論 1] 移行は身体そのままの移行か、身体なしの移行であるべきであり、非真実な身体を許して証明すべきでないこと。[反論 2] 死後はこの世からの分断であること>

⁽¹⁹⁷⁾ PVBh p.73,2 viśeṣayogini は P77a8 khyad par dag ldan pa la と訳されている。

⁽¹⁹⁸⁾ PVBh p.73,2 agnimātra-pravrttir を P77a8 me tsam la 'jug go と意味を取って読む。

⁽¹⁹⁹⁾ (Ya)91a8-91b1 「果の相違 [がある] のは、因の相違が無にはならないから、[現量に拠らず] 間接力より相違が成立するのである。これを説いて (煙より) と [敵者が] 言うのである。白檀より生じる等の相違を有しているのである。そうであっても、白檀の甘さを有している (煙より) 白檀の火が比量されるだけである。[敵者の] 疑義に叶っているのは、火のみより [火の知覚があると] 働いているというものが現量であるということである」とする。また (Ja)269b3 「すべての比量には共 [相] によって理解があっても、相違がありのままで結合を捉えている対象はありえない、ことを説いて (煙より) と言ったのである」とする。

⁽²⁰⁰⁾ (Ya)91b1-3 「答えが (この場合も) と言われる。[ある] 場所等より移行する一般的なもの (spyi) に現量のはたらく時、他 [の場所から移行したと] の確定を希求する等の形を有しているものとして、比量される如きである。同様に、前世からの移行は、一般的なものを成立するから、[確定を] 希求する等の相違を有している前世の成立を語り終わっているのみである。火に依存した力の顕現は、顕現としての形 [を有しているの] である」とする。

⁽²⁰¹⁾ P,D ではないが、PVBh p.73,3 etat より入れる。

〔反論1〕〔敵者が言う。〕「次のようなこともあろう⁽²⁰²⁾。例えば他の場所へ〔の移行を議論する〕場合、〔ある場所から〕他の場所等への移行は、身体を捨てずにまさにその身体によって⁽²⁰³⁾〔移行が〕あると〔現実〕に経験される。しかし⁽²⁰⁴⁾、夢の身体にとっての移行が真実でない如く、生の最初にある場合も、〔その身体による移行でないならば、身体なしの移行となるはずだが、〕身体を放棄しない状態と〔あるいは非真実な身体による移行という〕虚偽⁽²⁰⁵⁾となるであろうから合理ではない (asamañjasa)。即ち⁽²⁰⁶⁾

もし他の身体への〔そのものの身体による〕移行と〔前の身体を〕放棄すること〔による移行と〕が⁽²⁰⁷⁾真実と出会う（即ち真実に適う）ならば、その

⁽²⁰²⁾ (Ya)91b3-4「次のようなこともあろう」とは、他者の〔説〕である。これのみを要約して〈即ち〉と言われる」とする。また (Ja)269b3-6「他の身体より、他の身体への移行が成立する場合、それより矛盾する他の身体への移行を成立させるという反論 (‘gal ba) があるではないか。〔即ち〕夢の身体での移行を経験するからというこの〔立論者の主張で〕も、真実な別の身体への移行が成立する時、そ〔の論〕より矛盾した非真実な他の身体への移行を〔立論者は〕成立させるから、反論がある、と考えて〈次のようなこともあろう。例えば〉云々と言われる。それ故に、来世は真実であると経験される比量はどうして働こうとする場合、そう〔立論者の主張で〕あっても必ず反論があるという意味である」とする。

⁽²⁰³⁾ D64b5 lus de nyid kyi だが P77b1 lus de nyid kyis と読む。また (Ja)269b7「他の身体への移行と〔前の身体を〕放棄することが、まさにその身体への移行であるとする場合、矛盾であるものと答えを与えることを認めて、〈まさにその身体として〉と言われる」とする。

⁽²⁰⁴⁾ (Ja)269b6-7「夢のような〔移行を立論者の立場では移行とし〕ていても、移行が成立する時、ありのままの移行は矛盾であると判別し、〔即ちそれぞれが〕是認〔されるもの〕と拒絶〔されるもの〕とであると〔立論者によって〕矛盾が成立されることを語って〈しかし例えば〉と言われる」とする。

⁽²⁰⁵⁾ PVbh p.73,6 asattiyatā 是 P77b2 rdzun pa, D64b5 brdzum pa と訳される。

⁽²⁰⁶⁾ P77b2 'di ltar – 是 D64b6 'di ltar / – と読む。またここは (Ya)91b3-4 より敵者の説であるとする。

⁽²⁰⁷⁾ (Ya)91b4「他の身体 (Y) にとって、ある〔身体 (X) 〕によって〈移行して〉いるとき、その〔身体 (X) 〕を捨てている、〔即ち身体なしの場合が〕まさにその身体 (X) の移行という意味である」とする。

ことが他の世の証明は [確かに] 真実である⁽²⁰⁸⁾ [ことを認めよう]⁽²⁰⁹⁾。
(4 5 6)

[反論 2] また夢の知覚がない⁽²¹⁰⁾時、眠り [の中の認識] が [この世から] 完全に分断される如く、その如く一方もし死の前後にそのように [完全に次の世の身体がこの世の身体から分断された状態に] なるならば、[汝等の立論は] 用をなさない⁽²¹¹⁾。⁽²¹²⁾ (4 5 7)

[解説 1] 実に⁽²¹³⁾他の場所への移行が、身体なくしてある [ということが証明

(208) (Ya)91b4 「(幸福を完成するだろう) とは、隠されたものを開くこと (??gter chad) である」としている。

(209) PVBh p.73,7

śarīrāntarasañcāratyāgau satyasamāgamau /
syātām yadi tataḥ sattyam paralokaprasādhanaṃ /456/
P77b2-3
gal te lus gzhan 'pho ba ni /
dor dang bden pa dang 'brel na /
de phyir 'jig rten pha rol ni /
*bden par rab bsgrub 'gyur ba yin /

*(Ya)91b4 では bde bar bsgrub pa 'gyur ba yin

(210) (Ya)91b4-5 「(例えば夢の) というある時とは、夢の (知覚がない) 場合という意味である」とする。

(211) (Ya)91b5 「(死の後)、生が過去として分断されてしまうならば、その時来世を語る者達 [の論] によって (何が [有効的だろ] と導かれる) とする。

(212) (Ya)91b4 「他方 [の偈文] も、[他者によって] 語られているのである」とする。

PVBh p.73,8-9
yathā cātyantavicchedaḥ *svapno **svapnānupalambhane /
***tathaivaṃ maraṇāt pūrvam paścāt tu yadi kiṃ kṛtā /457/
P77b3
ji ltar rmi lam dmigs med par /
gnyid log gtan du rnam 'chad pa /
de bzhin gal te 'shi ba yi /
snga phyir der 'gyur ci shig byas /

*P,D より svapne より変える。

**svapnopalambhane より変える。

***tathaiva より変える。

(213) (Ya)91b5-6 「(如く) と [語って] いる [こと] 等によって、最初の偈文 [No.457] によって語っているのである」とする。

されれば、その] 如く、もし他の生への移行も [身体なしで] あるとすれば、[私とは] 逆 [の則ち汝の説のため] の証明がもたらされよう⁽²¹⁴⁾。

[ところが汝の主張では、] そのように夢 [の中で] の移行が非真実な⁽²¹⁵⁾ 身体を肯定して⁽²¹⁶⁾ (即ち放棄せずに) 経験されるから、他の世への移行もその [非真実な身体を肯定する] ようになるだろうとすれば、[移行の] 前後の世界は非真実であることになって [夢の実例を使って証明した、移行の証明は成立しない] とナーステカの者⁽²¹⁷⁾ 達によって認められている。

[解説 2] 更に他方⁽²¹⁸⁾ 「[夢を比喻にするならば] 睡眠の状態で、夢を見ない者にとっては認識が分断される (即ち認識のない) ことあるいは不明瞭な認識がある如く、もし他の世もそうであるならば、そのような [移行のないことあるいは不明瞭な移行があれば、それ] がどうして役に立とう」とナーステカの者達の見解は損壊されていない [とされている]。「別の世を論じる者達に [よる別の世の議論] によっても⁽²¹⁹⁾ 何が [有効的議論と] なされよう」と言うならば⁽²²⁰⁾、この場合次のように [私によって答えが言われる] ⁽²²¹⁾。

4. 4 (p.73,16-p.73,18) 〈4. 3 への反論。夢の認証による反証〉

実にその身体による [他の身体への] 移行は [真実であることが]、現量によって拒斥される。[他方] 前 [世] の身体を捨て [た移行があるというの]

⁽²¹⁴⁾ (Ya)91b6 「(逆に証明がもたらされよう) とは、(身体なし) の場合、生じること [がある] と成立 [してしまう] ということを意味するのである」とする。

⁽²¹⁵⁾ 文意により、PVBh p.73,11 satya を P77b4 mi bden pa から 'sattya と読む。

⁽²¹⁶⁾ Tib. ではそれぞれ P77b4 rjes su 'gro ba can、D65a1 rjes su 'gro ba can du とする。

⁽²¹⁷⁾ Nāstika、Med pa rnamts とは、正当バラモン達が、仏教やジャイナ教、チャールヴァーカの者などを差した言葉であるが、この場合は、唯物論者のチャールヴァーカのみを差したのであろう。

⁽²¹⁸⁾ (Ya)91b6 「(更に他方) とは、第二の偈文 [No.457] を分析しているのである」と解釈する。

⁽²¹⁹⁾ Tib. のみに kyang あり。

⁽²²⁰⁾ Tib. のみに zhe na あり。

⁽²²¹⁾ (Ya)91b7 「この場合 (次のように言われている) というのが答えである」とする。

が] 他方の見解⁽²²²⁾である [が、それも知覚がないことから、真実であることが、現量によって拒斥される]。⁽²²³⁾ 〈458〉

一切の夢による認証 (saṃvedana) は⁽²²⁴⁾、真実な認識から生じる⁽²²⁵⁾。

(222) (Ya)91b7-8 「(他方の見解) とは、現在の身体の刹那を経験していることは、(前の身体を放棄すること) [ということだが、それは] ないことである。何故ならば、知覚がないことより、別 [の前の身体を放棄するという] ありえないことがないからである」とする。

(223) PVBh p.73,16

tenaiva hi śarīreṇa sañcāro 'dhyakṣa-bādhitaḥ /
parityāgaḥ śarīrasya pūrvakasyānyadarśanam /458/
P77b7-8

lus de nyid kyis 'pho ba la /
mngon sum gyis ni gnod pa yin /
gzhan mthong ba nyid sngon gyi ni /
lus po yongs su *'dor ba yin /

* (Ya)91b7 では dor ba とする。

(224) (Ja)269b7-8 「非真実なものよりやってくる [という他者の説へ] の答えが (一切の夢による認証は) と言う」とする。

(225) PVBh では奪格あるいは属格の単数を示しており、仮に奪格で考えた場合には、このような訳になり、属格で考えた場合には「真実な認識を生じる [条件の範囲の]、一切は」とすることも可能である。また Tib. では bden pa'i rnam shes rnam 'grel yin として両者の説明句となっている。

一方夢から真実な認識があるとして、どうして矛盾性があろう⁽²²⁶⁾。(227) 〈4
5 9〉

[夢からの] 一切の分断は覚醒に関連するものとして知覚される⁽²²⁸⁾。死から

(226) (Ya)91b8-92a2 「非真実と結びついている、という [敵者の] 論難に対して語って 〈夢の一切の認証は〉 と言うので [ある。それは] 『夢という非真実な対象の働きが無のみである (即ち何も無い) と成立される如く』 その [敵者の論] を容認しても、夢の認証は実際真実であるからとするならば、[夢は] 真実として生じられるべきであり、また真実を生じるものとして矛盾はない。そのように来世についても、その両者 [即ち真実として生じられ、真実を生じるもの] に矛盾はない。故に 〈[来世が] あると論じる者達〉 の求めを受け入れていると密意しているのである」とする。

(227) PVBh p.73,17

svapnasamvedanaṃ sarvaṃ sattyavijñānaṃ /
svapnāc ca sattyavijñānaṃ iti kaiva virodhitā / 459 /
P 77b8-78a1
rmi lam* rig pa thams cad ni /
bden pa'i **rnam shes rnam 'grel yin*** /
rmi lam las kyang bden pa yis**** /
rnam shes yin phyir ci shig 'gal /

* D 65a3 より P の pa を取る。

** D 65a3 rnams は採らない。

***sambaddhaṃ となろうが、Skt. 文と相違する。

****yin の方がよかろう。

(228) Tib. では 'brel nyid としているが、PVBh に従った。

の分断も、真実な覚醒と関連したもの⁽²²⁹⁾である⁽²³⁰⁾。⁽²³¹⁾ 〈460〉

4. 5 (p.73,19-p.73,26) 〈身体を放棄することによるこの世の身体存在〉

⁽²²⁹⁾ (Ja)269b8 「〔夢から〕常に分断がある」ということに答えて〈覚醒するものに顕連するものとして知覚する〉と言ったのである」とする。

⁽²³⁰⁾ (Ya)92a2-3 「〔一切の分断〕は〈真実な覚醒に関連して〕おり、〔一切の分断は〕真実による覚醒との結合 (D より 'bral を 'brel とする) であって、何故ならば、覚醒のみは真実ではない、という疑義とはならない、とされるからである」とする。

⁽²³¹⁾ PVBh p.73,18

prabodhasaṅgataḥ sarvo viccheda upalabhyate /
maraṇād api vicchedaḥ sattyatābodhasaṅgataḥ /460/
P78a1-2
rnam par chad pa thams cad ni /
sad pa dag dang 'brel par dmigs /
shi nas rnam par chad pa yang /
bden pa'i sad pa dang 'brel ntid /

次のように〔既に〕言われる⁽²³²⁾。認識は、こ〔の世〕の身体に〔生が〕ある時、前〔世〕の身体と結び付いた〔前世の〕認識を修習した果として知覚されつつある〔とされている〕。その〔修習説に〕よっては⁽²³³⁾、確定的に〔前の〕身体を放棄せずに（即ち身体なくして）は〔この世の認識は〕ありえないから、どうして〔前の〕身体を放棄してしまわないことがあるう⁽²³⁴⁾。前世の身体を放棄するということが必ず経験される〔はずだ〕。〔即ち〕こ〔の世〕の身体を知覚するということは、前〔世〕の身体を放棄することを知覚するということ⁽²³⁵⁾に他ならない。〔よって現在の身体を知覚しているならば、前世の身体を放棄させなければならない。〕

⁽²³²⁾ (Ja)269b8-270a2 「もし、まさにその身体へ移行する時、現量によって拒斥がある場合、他の身体へも、〔移行が〕経験されないから、移行するものとはならないというその考えを、結論付けて（次のように言われる）と言うのである。〈修習〉によって生じられる相違は、不離の関係であるこ〔の身体〕に、それがないから、以前の有を確定することによって、そ〔の前〕の身体と〔この身体を〕結合するという意味である」とする。また (Ya)92a3-7 「（これ）と他者の願いによって語り尽くして、〔立論者の論証する〕分断は成立しない、と排除されるべきである。他の村からやってきた場合、もし（前の身体）を捨てるならば、たとえ道理によって成立する、疑いがある場合でも、〔前世から〕この世に〔移行すること〕についてはそのように分別はできないのであり、他の場所からやってくる如く、前後〔の生〕を認めている身体は知覚がないのである。故に現在の心を有する身体は、まさに前〔の身体〕がないものが生じているのであると考えるというこれは、（既に語られている）とおっしゃるのである。対象と結合した心は、身体を生じるが、前の身体を捨てることのみによってある、という意味である。そ〔の前の身体を放棄するということ〕を分別する〔という〕ことを、明かにするのみの場合である。故に前の身体を捨てることは、経験があるとおっしゃっている。前の身体を成立する意味として認められる他〔の身体〕も記憶されるべきであるので、他者の疑義に合致して（前の身体は成立しないので）と考えられうの」とする。

⁽²³³⁾ PVBh にはないが、Tib. dmigs pas によって入れる。

⁽²³⁴⁾ 文意及び P78a3 より、*śārīraparityāgaḥ* を *śārīraparityāgaḥ* と読む。(Ja)270a2 「捨ててしまう」とは、続き〔の言葉〕に『前の身体を経験する』を〔入れる〕と言うのである」とする。

⁽²³⁵⁾ P78a3 では、*lus 'di dmigs pa nyid sngon gyi lus dmigs pa yin no* とし、D 65a5 では *lus 'di dmigs pa nyid sngon gyi lus dmigs pa ma yin no* として D 訳の方が近いとはいえ、意味が遠のいている。

[敵者が]「前[世]の身体を成立させずに⁽²³⁶⁾、どうして前[世]の身体を放棄することが成立しよう[前の身体を必ず成立させなくてはなるまい。]」と言うならば、[答えよう。そのような汝の主張は成立し]ない⁽²³⁷⁾。

身体等の大きな喜びが、[過去の]身体の歓喜に基づいて成立する⁽²³⁸⁾場合、[実際に目の前になくとも]そのことから、前の我々の身体は必ず成立する。
⁽²³⁹⁾ 〈4 6 1〉

相違を有した前[世]の大きな喜びが[この世の身体にも]成立することのみから[汝の論理を用いずとも]、前の身体は成立する。まさにそ[の過去]の身体[自

(236) P78a3 では - ma grub pa だが、D 65a6 では - ma grub par , PVBh p.73,21 pūrva-śārīrāprasiddhau を採る。また (Ja)270a2-3 「前世の身体は、時間 [の経過] 等によって、劫があるから、顕現しないとすると時、[直前であるという] 経験がないことによって、[その身体は] 無とどうしてなろうと言って 〈前[世]の身体を成立させずに〉 と言ったのである」とする。

(237) PVBh では、欠だが Tib. に従って入れる。

(238) (Ja)270a3-4 「顕現がなくとも、[前の身体は] 比量より成立すると語って 〈ないのであって、身体等がある時〉 と言われる」とする。また (Ya)92a7 「〈ないので〉 とは答えである。身体を対象にすることによる [証明の] 場合、[前後の身体が] 相違を有しているのである」とする。

(239) PVBh p.73,23

na* śārīrādy-abhiratiḥ śārīra-rati-pūrvikā /
yadā prasiddā tatpūrvva-śārīram siddham eva naḥ /461/
P78a4

**gang tshe lus sogs mngon dga' ba /
lus dga' sngon 'gro can yin par /
grub pa de phyir kho bo yi /
sngon gyi lus ni grub pa nyid /

*この na はおそらく直前の散文のものであり、この偈の a か b の部分にもう一母音増やされているものと思われる。

** (Ja)270a4 では gang gi tshe lus la sogs とされる。

体]は⁽²⁴⁰⁾、現在には知覚がないのである。しかし過去は知覚されていない⁽²⁴¹⁾ [から⁽²⁴²⁾、その過去]は、そ[の現在]の時点でも、存在しないということはないのである。それ故に⁽²⁴³⁾前の身体を⁽²⁴⁴⁾放棄することはないのである、というこのことは、現量によって拒斥される⁽²⁴⁵⁾。

5 〈夢による論証の妥当性〉

5. 1 (p.73,27-p.73,30) 〈夢を非真実だと容認した場合〉

次も[敵者によって]言われる⁽²⁴⁶⁾。「非真実な夢から、こ[の覚醒した状態]に来る如く、非真実なあ[の世]から[この世に来るのは妥当ではない]。また⁽²⁴⁷⁾こ[の覚醒した状態]から非真実な夢の身体に行く[のが妥当ではない]如く⁽²⁴⁸⁾、あの世へ[行くこと]も[妥当ではない]から、あの世は必ず非真実である」[と云うな

⁽²⁴⁰⁾ (Ya)92a7-8 『前の身体を確定して、放棄することが、どうしてあろう』と言うならば、(その身体)と言われる。その場合[前の身体の]非知覚から前がないというのみである、と考える時点は、覚醒[している状態]と考えられる。」とする。また (Ja)270a4-5 「比量の対象を経験しないことのみより、どうして無を成立しようとする場合、その場合、現在の身体がないことを知覚しないことは、量ではないというのみである。何故ならば、その本性は[現量の本性より]相違しているからである、ということを書いて(その身体を現在知覚することはないのである、と言うのである)」とする。

⁽²⁴¹⁾ (Ja)270a5-6 「相違が否定されるべきであるとき、他の非顕現の非知覚を成立させることはないということを書いて(過去は知覚されないから)と言われる」とする。

⁽²⁴²⁾ PVBh にはないが、Tib. の ma dmigs pas による。

⁽²⁴³⁾ (Ya)92a8-92b1 「敵者の論の」後半[への反論]を語って、後[半]を要約することを通じて、前半を判断して(それ故に)と言われる。その現量である性質は、痴 (rmoñs pa) を知覚することがないと語っているのである」とする。

⁽²⁴⁴⁾ (Ja)27016 「その本性の否定を要約して、それ故に(前の身体)と言われる」とする。

⁽²⁴⁵⁾ PVBh では adhyakṣa-bādhitam だが、Tib. mngon sum gyis gsal lo としている。

⁽²⁴⁶⁾ (Ja)270a6-7 「夢の中のすべての認識は、という[ことについての説明]が、(言われる。例えば)云々から(語ろう (PVBh p73,30)) まだが語られる」とする。また (Ya)92b1 「(言われる)云々によって語り終わっている、論争と答えを語って、相違を語っているという意味として[論争と答えが]あるのである」とする。

⁽²⁴⁷⁾ PVBh p.73,28 ca と P78a7 am とである。

⁽²⁴⁸⁾ PVBh では tathā とするが、P78a7 より yathā とするのが妥当だろう。

らば、答えよう]。それもまた合理ではない。何故ならば、非真実 [だと容認しても] 夢は、真実 [な覚醒の状態] よりでたもの (anvayin) である⁽²⁴⁹⁾。また [非真実な夢は] 真実な認識 (即ち覚醒知) の因であるから、そ [の前後の生の間⁽²⁵⁰⁾] がその [夢の] ようであり⁽²⁵¹⁾、中間的存在である、と我々は [後に] 語ろう⁽²⁵²⁾。

5. 2 (p.73,30-p.74,4) 〈夢を非真実だと容認しない場合〉

あるいは [別の解釈をすれば]⁽²⁵³⁾

一切の認識が [必ずしも] 夢より相違したものとして確立しているのではない、ともし我々が語るならば⁽²⁵⁴⁾、その主題こそ⁽²⁵⁵⁾が、そ [の証明される

(249) (Ya)92b2 「(真実より出た) とは、真実と過失 (bden pa'i nyes pa) との結合である」とする。

(250) PVBh p.73,29 sa の示す内容は (Ya)92b2 より入れる。

(251) (Ya)92b2 「(そのようであり) とは、夢と似た真実と認められる、前後 [の生] の中間で生じた〈それが〉である。確立した場合とは、状態の相違である」とする。

(252) (Ya)92b3 「(語ろう) とは、存在である中有の身体を、鮮明に知覚しないことはない、というその場合である。これも夢の知覚は非真実であると容認して語っているのである」とする。具体的には PVBh p.89,15-p.90,24 付近を指すものだと思われる。拙稿「PV II 83,84 の解釈をめぐる—中有の存在論証の有無と中有の有無—」『論叢 アジアの文化と思想』第4号、アジアの文化と思想の会、1995 参照。

(253) (Ja)270a7-8 「夢の如く一切の認識のみが、自と他の果性としては真実であるが、所取・能取関係によってはありえない。何故ならば分別のみであるから、と語って (あるいは) と言われる」とする。また (Ya)92b3-4 「[夢の認識が非真実であると] 容認しなくても、過失はないと語って (あるいは) と言うのである」とする。

(254) P78b1 では de ltar とする。

(255) (Ya)92b4 「(これこそ) としてどうして判断されないだろう、と考えるとき (この主題こそ) それであると考えるのであって、〈夢〉と〈夢でないもの [という他のもの]〉は相違がないから、成立する主題はまさにその唯識論者である」とする。

べき主題] ⁽²⁵⁶⁾そのものである。⁽²⁵⁷⁾〈462〉

実に夢の認識と他方〔の覚醒知〕は、如何なる相違もないと語られる⁽²⁵⁸⁾。故にまさに夢〔の中〕の身体の如く、〔この世から〕あの世の身体への移行も成立する。故に⁽²⁵⁹⁾、別の場所からやってきたものに、たとえ習気の知から〔ある〕という相違によって、〔前世の身体の認識に対して〕有障害 (pratigha) と⁽²⁶⁰⁾他方〔則

⁽²⁵⁶⁾ P78b1 では 'di とする。

⁽²⁵⁷⁾ PVBh p.73,31-32

sakalaḥ pratyayaḥ svapnād na viśeṣatayā sthitiḥ /
yadi paścād vadiṣyāmaḥ prastāvo 'sya sa eva hi /462/
P78a8-78b1
yang na shes kun rmi lam las /
bye *drag med par gnas so **zhes /
de ltar **phyi nas bshad bya ste /
'di 'i skabs ni 'di nyid yin /

* P の thag を D65b2 より直す。

**D65b2 zhas は採らない。

***「将来」と PVBh の未来形は訳されるが、主語「我々」を省略し、一般的な受動態にする。

⁽²⁵⁸⁾ P78b1 では 'chad par 'gyur とする。また (Ya)92b4-5「〈語られる〉とは、夢という状態によってあるものである、と説いているものであり、それが真理であって、深いこと(深さ)によって、〔夢の認識と夢以外の認識が〕順次を有しているという意味である。相違がないということのみである」とする。

⁽²⁵⁹⁾ (Ja)270a8-a70b1「もし一切が夢と同じである場合、(障害を持つ) [ものが] 覚醒する場合にはあるが、他 [の夢] の場合には、そ [の生涯を持つこと] より否定があると、そのようにどうして区別が生じよう。習気の区別より [その区別が] あると説いて〈それ故に他より〉と言うのである。最初 [の生] を有していること等も、認識の本性としてあるが、他としての [認識を] 放棄する特性はないのである、という意味である」とする。また (Ya)92b5-7「〈それ故に〉とは、移行がない故に、である。身体を認識する本制であつても、前後の二つの身体には〈障害を〉有していることを語っているのである。何故ならば習気によって作られているので、その状態には他 [の身体] の認識が生じないと確定されるからである。中有では障害がないと語っているのである。その他は他 [自身] の認識を生じることがあるからである。(等) という言葉によって、遠く [の生] に働かし、そのようにはない等 [という言葉] も協力するのである」とする。

⁽²⁶⁰⁾ P78b2 -thogs pa dañ bcas pa dang / -の / (shas) を D のように取る。

ち無障害]等という相違⁽²⁶¹⁾があっても⁽²⁶²⁾、しかし⁽²⁶³⁾相続を断滅することは決してない⁽²⁶⁴⁾。故に生類の相続の断滅はないということから、来世は成立する。何故ならば、死等は⁽²⁶⁵⁾、習気の特相を持った、確立させる力 (sthity-āvedhaka) が多種であるからである⁽²⁶⁶⁾。心 (cetas) は、[単一な]心 (cittta) を否定しない (anivṛtti) という矛盾をもって、確立しているのではない。何故ならば、そのような心に否定されないような]心 (citta) は決してないからである。

(261) P78b2-3 byad bar を D65b4 khyad par にする。

(262) Tib. では yang を入れる。

(263) PVBh p.74,1 にのみあって、Tib. にはない。

(264) (Ya)92b7-8 「(相続を断絶することは決してない) とは、そうであっても、一切の形相として、相続した認識を分断することは経験されないということのみ [を示して] いる。〔夢の〕認識の断絶は、覚醒と関連しているのみと経験するという意味である」とする。

(265) (Ja)270b2-8 「[生の] 確立と死等も、業という、多種の習気のみ [が因] であると説いて (死等は確立) と言われる。即ち例とされる身体を投げ (即ち放棄し) ない場合、移行または非真実である相違を認めることがない、相違等の果を遍充させることがないから、[それ故に] 移行のみを成立させることと矛盾することがない。よって陶器に色づけられる性質 (tsho par bya ba nyid) という相違は、無常性として顕現する遍充はないのであっても、そのようであって、そ[の、常住に色づけられる性質]のみである [陶器] はないのである。この場合にも、移行のみを遍充させるが、(他方) はないのである。何故ならば真実の如く知覚するから、と説いて (その身体の移行の場合) と言うのである。生じられた相違を有した心を有することがない質料であるならば、確定を必ず有した遍充は、心を有する者達にとって、その相違はないから、そ[の身体の移行]のみから、知覚を有している [証] 因性として成立することはない、という意味である。夢の認識も、認められる相違と結び付いているから、他者性を拒斥しても、自相がないことはないから、[証] 因性を滅することはないと説いて (夢の一切の認証は) と言うのである。真実と非真実性は、拒斥と拒斥しないことの二つによってあるのであるが (gyis → gyi)、自性を成立させ r y ことよりあるのではない。まさに夢においてあるいは [自相との] 結合性を経験するから他の場合にも、真理の如く成立せしめているという意味である」とする。

(266) PVBh では / (daṇḍa) がないが、Tib. に従って訳す。